

佐賀県

事務局 〒845 佐賀県小城郡小城町178-9 小城保健所内
小川 稔 TEL 0952-73-2201

〈沿革〉

昭和51年佐賀国民体育会(若楠国体)を迎え、県は未普及スポーツの推進に力を入れ、昭和41年中頃に県から多久工高へウエイトリフティングを開設するよう指導があり、古賀甚一郎校長(二代目)の尽力によって器具の購入、プレハブ作り練習場が建設し、ウエイトリフティングの練習が本県で初めて開始した。

その後、昭和42年度初期、本県で初めてウエイトリフティング協会ができ、始動した。

県ウエイト協会の組織は

会 長 豊増 清八
(多久工業高校長勤務)
理 事 長 中島 照久
(多久工業高校勤務)
事務局長 石井順二郎
(多久工業高校勤務)
理 事 瀧広 正俊
(多久工業高校勤務)
前田 和弘
(多久工業高校勤務)
山本 秀明
(宮島醤油(株)勤務)

会員6名は、手探りの状態で始動し、国民体育大会に向け選手強化策と大会運営法等の2課題について研究検討していった。

選手強化策として、ウエイトリフティングの知識を持った先生を中心に1校の生徒と一般数名を指導してもらい、また、他県よりコーチを招聘し、3種目の技術や練習方法を指導して頂き、生徒達を近県へ毎年数回、練習試合に派遣してウエイトリフティング競技や運営法についての技術を習得していった。

大会運営法等については、九州連盟の先生方を招聘し、学習会を設定、先生の指導を受けて一步一步前進することができた。

昭和42年4月、瀧広正俊が有田工高

へ転勤と同時に、ウエイトリフティング部をスタートさせ、高校は2校体制になった。その後、生徒達は切磋琢磨し、競技力が向上し、44年全国大会に初めて2名派遣できるようになった。

昭和45年に、若楠国民体育大会のウエイトリフティング競技会場は有田町に決定したために、協会の再編成が行われた。

県ウエイト協会の組織は

会 長 竹内 通教
理 事 長 石嶋喜美由
(有田工業高校勤務)
事務局長 石井順二郎
(多久工業高校勤務)
理 事 瀧広 正俊
(有田工業高校勤務)
前田 知弘
(多久工業高校勤務)
山本 秀明
(宮島醤油(株)勤務)

この年、本県から、協会発足以来初めて高校生が全国大会で、小川稔(多久工高)はF級で第2位入賞、また、昭和47年(大学)にPでジュニア世界新記録を樹立、その後、国際大会に日本代表として3回出場し立派な成績を残している。

佐賀の片田舎から優秀な人材が輩出したことは、私達の喜びだった。

〈年次別概況〉

昭和48年度、協会の一部再編成が行われた。

会 長 竹内 通教
理 事 長 石嶋喜美由
(有田工業高校勤務)
事務局長 瀧広 正俊
(有田工業高校勤務)
理 事 前田 知弘
(多久工業高校勤務)
山本 秀明
(宮島醤油(株)勤務)

昭和51年若楠国民体育大会には、少年

歴代会長

初 代 豊増 清八 (昭和42年～)
第2代 竹内 通教 (昭和45年～)
第3代 山口 正二 (昭和59年～)
第4代 中尾裕次郎 (平成5年～)

の部3名、成人の部4名、監督は瀧広正俊が出場、競技成績について8位までの入賞者をあげると、

少年の部(会場：有田工高体育館)

入賞者なし

成人の部(会場：有田町文化体育館)

F級 小川 稔(佐賀県庁)2位

B級 前田 勝秀(佐賀県庁)4位

昭和52年青森国体

少年の部

F級 古賀 丈史 (有田工高)3位

53年全国高校総体(山形県開催)

B級 古賀 丈史 (有田工高)2位

昭和53年鳥取国体

少年の部

B級 古賀 丈史 (有田工高)2位

古賀丈史選手は、高校時にB級日本代表として、ギリシャで開催されたジュニア世界大会に出場、14位の成績をおさめ、卒業後は愛知県のとヨタ自動車工業(株)に勤務。

本県で、高校生が世界大会に出場したのは初めてで、小川に続くトップリフターとして賞讃し、私達の誇りとしている。

なお、九州高校体育大会において、

昭和51年度 有田工高 準優勝

昭和52年度 有田工高 優勝

昭和53年度 有田工高 準優勝

昭和55年度 有田工高 準優勝

有田工高は、優勝1回、準優勝3回という立派な成績を残している。

昭和53年度、前田知弘が転勤のため多久工高は休部となり、有田工高の1校体制となった。多久工高は昭和60年度に部を復活させ高体連に再加盟し、2校体制になった。

昭和59年度3月、石嶋喜美由(有田工高)の定年退職のため協会は再々編成される。

昭和59年度から平成5年6月までの県

ウエイト協会の組織は

会 長 山口 正二

理 事 長 瀧広 正俊

(伊万里商業高校勤務)

事務局長 瀧広 正俊
理 事 山本 秀明

(宮島醬油(株)勤務)

平成4年度、前田知弘は、有田工高へ転勤と同時に高体連の専門委員長を引き受け、来年の九州大会に向けて各企業からの資金援助依頼、県への依頼、競技役員の委嘱・指導等に奔走した。

平成5年6月中頃、九州高校大会を当校先生達の協力を受け、有田工高体育館で開催した。競技には多数の日本高校新が樹立され、成功裡に終了した。しかし、大会前後間ウエイト協会から援助はなかったが高体連事務局や県体育保健課等からの援助があり、大過なく終了した。

その後、6月末日に県体育協会の中島専務理事へ、瀧広事務局長からウエイ

ト協会の仕事を辞めたいとの意向があり、文書で辞表を提出、県体育協会は受理した。

4カ月間、当協会は消滅していたため、県体育協会と九州連盟より存続するよう強い要望があり、やっと平成5年11月初めに新メンバーで編成、現在に至っている。

新編成した県ウエイト協会の組織は

会 長 中尾裕次郎

(佐賀工業専門学校校長)

副 会 長 中島 照久

(西九州大学教授)

理 事 長 前田 知弘

(有田工業高校)

副理事長 山本 秀明

(宮島醬油(株))

事務局長 小川 稔

(小城保健所)

理 事 23名

新協会になって、平成7年5月、熊本県鏡町で開催された一般の九州選手権大会に15年ぶりに参加したが団体成績は最下位だった。

平成8年5月、九州選手権大会を16年ぶりに県の援助をえて佐賀市総合体育館で開催、団体成績は昨年より少し向上した。この大会開催にあたり会員は、初経験のため、運営費の調達や大会運営面・競技役員の張り付け等に苦勞したが大過なく終了した。

現協会はできたばかりの未熟な組織で、私達は初心に返って努力する所存です。日本協会並びに各県の方々に御指導や御報捷の程を御願い申し上げます。

長崎県

事務局 〒854 長崎県諫早市宇部町27-1 長崎県公園緑地協会内
浜崎 芳宜 TEL 09572-2-0129

〈沿革〉

協会創立以前

本県のウエイトリフティングは長崎国民体育大会を前に本格的に活動しはじめたが、実は戦後すぐ細々ながらも活動した時代があった。その関係者は堤武男(元理事長)、堤隆宣(元副理事長)の兄弟と芦刈敏郎の三氏である。

昭和22年の第2回国体から第4回まで参加し好成績をあげた。当時、この競技の大会は全日本選手権くらいのもので、九州あたりでは全く競技の場がなかった。その意味からこの競技において九州でのパイオニア的存在であるといえる。しかし、せっかく芽生えたその芽も、職場の無理解により国体出場(兼日本選手権大会)が不可能となり、ここで長崎県ウエイトリフティングは途絶え、一時休息することとなった。

協会創立に至る経緯

第18回国民体育大会が昭和44年に長崎県で開催することが決定し、それに対応する為、急速、昭和20年代に選手として活躍されていた前述の堤兄弟が中心となり、昭和39年5月10日付で長崎県ウエイトリフティング協会が設立された。

国体の開催地である当時の松浦市長(田川佐一)が初代の会長となり、以下、理事長に堤武男、副理事長兼事務局局長に堤隆宣が就任した。

〈年次別概況〉

昭和22年

当時、体力増強の為に重量挙げに取り組んでいた堤武男(元理事長)が第1回京都国体の記録を見て決意。第2回石川国体にL級で出場し見事2位に入賞し長崎県におけるウエイトリフティング競技のスタートを切ることとなった。

昭和23年

堤武男が第3回福岡国体に出場し、L級でT280kgを出し初優勝を飾る。また

兄に刺激された弟の堤隆宣(元副理事長)と芦刈敏郎も同大会に出場。芦刈はF級で3位。堤隆宣はFe級で4位に入賞。当時、兄弟での入賞は珍しく話題となった。

昭和24年

第4回愛知国体には、前年に続き3名が出場。芦刈敏郎はF級で6位。堤隆宣はFe級で3位。堤武男はL級で2位に入賞した。

昭和25年

堤隆宣が長崎に就職し、国体出場を目指したがブロック予選がなく出場することに上司からの理解不足のクレームがつき出場を断念。兄の武男も同調し国体出場を取り止めた。

せっかく芽生えた長崎県におけるウエイトリフティング競技も、これを機会に全体的な活動が停止し、個々のものとなって長い眠りについてしまった。

昭和39年

昭和44年度第18回国体大会を長崎県で開催することが決定し、堤兄弟を中心に5月10日付で正式に長崎県ウエイトリフティング協会が発足した。実に14年振りの県ウエイトリフティング競技の復活であり、新しい旅立ちとなった。

昭和40年

第1回県高校総体を佐世保北高校にて実施。国体強化指定校7校が参加。低調な記録ではあったが、競技会の運営、ルールの徹底などと共に競技力向上へ向けての新年度となった。

昭和41年

県民体育大会にウエイトリフティング競技が初参加。参加者は長崎大学の学生と社会人数名が新しい初参加であった。大分国体に社会人2名、大学生3名が参加。全国とのレベルの違いを痛感した。一方、高校生では荏原昭(佐世保北)がB級で本県只一人、本県初の全国高校総体へ出場(黒石市)し未熟ながらも全国の強豪と対等に渡りあってきたことは、全国に向けて我々に大きな

歴代会長

- 初代 田川 佐一 (昭和39年～)
- 第2代 春藤猪間吉 (昭和41年～)
- 第3代 宮原 一夫 (昭和43年～)
- 第4代 山下 武人 (昭和45年～)
- 第5代 藤本 勝喜 (昭和53年～)

自信と勇気を与えた。

昭和42年

一般、高校生共に各大会に出場するが芳しい成績をあげることができない。それと共に、練習器具不足、練習場の不備など競技力向上対策以前の問題が山積した。

昭和43年

長崎国体運営の総決算として、松浦市で全日本社会人選手権大会を開催。4名出場するが9位が最高。本大会へ向けての不安材料のみが残った年である。高校では逆に強化の効果が見えはじめ、全国高総体(府中市)にてF級で早田哲朗(諫早農業)が3位。Fe級で花田泰治(長崎北)が2位に入賞。

昭和44年

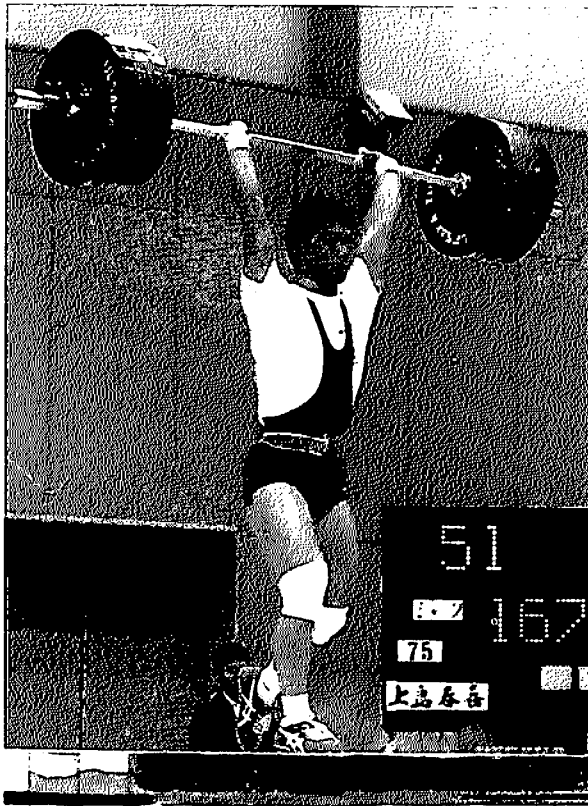
第18回長崎国民体育大会を松浦市で開催した。成績は成年の部において期待の花田(中大)が失格するなど思うような成果が見られなかった。その中で少年の部で、吉田建規(諫早農業)がL級で失敗しながらも3位入賞。その他、B級で吉村輝之(長崎北)が5位。M級の室野秀則(諫早農業)が6位に入賞した。残念ながら、国体開催地としての郷土への責任を十分にはたすことができなかった。国体に先立ち、全国高校総体(藤岡市)で団体において諫早農業高校が念願の7位に入賞。個人ではL級で吉田建規(諫早農業)が6位入賞し今後へ期待を持たせた。

昭和45年

一般及び高校生も目立った実績もなく低調な年となる。しかし、高校2年生に有望な選手が目立ち、反面夢多き年でもあった。

昭和46年

諫早農業高校が徳島県鴨島町で開催された全国高校総体において、夢にまで見た念願の初優勝。創部7年目の快挙である。今でもずっしりと重く、菊の紋章をあしらった深緑のあの優勝旗の感触を忘れることができない。



上島政隆のジャーク

諫早農業高校の団体初優勝は、中国・四国・九州の西日本地区で始めてのでき事であり、加えて低調気味の九州において大きな自信となった。和歌山国体では、島屋八生(諫早農業)がFe級で他を圧倒し、340kgで優勝し、M級で樋口博喜(諫早農業)も3位に入賞した。

昭和47年

全日本学生選手権大会において、吉田建規(名城大)がLH級で初優勝。鹿児島国体、少年の部において朝長寿彦(諫早農業)がM級で3位に入賞し他の階級でも合せて5人が全て入賞。

昭和48年

全日本学生選手権大会で吉田建規(名城大)がMH級で二連覇。加えて全日本選手権大会で同選手がLH級で3位に入賞。

全国高校総体(亀山市)で諫早農業高校が二度目の団体優勝。無欲の勝利であった。個人では、長木豊(諫早農業)がL級で優勝。B級で大嶽政則(同)が3位に入賞した。

千葉国体では、吉田建規(名城大)がLH級で優勝し、実りある年であった。

昭和49年

全日本学生選手権大会において、上島政隆(名城大)がLH級で2位。全日本選手権大会で島屋八生(日体大)がFe級で3位に入賞し、なお同選手は世界選手権大会にも出場しFe級で6位に食

い込む。茨城国体では、上島政隆(名城大)がMH級で3位に入賞し学生陣の活躍が目立った。全国高校総体(北九州市)では、L級で植田利喜男(諫早農業)が3位に入賞し一人気を吐いた。

昭和50年

全日本学生選手権大会で島屋八生(日体大)がFe級で、上島政隆(名城大)がLH級で共に優勝。全日本選手権大会で吉田建規(小浜消防署)がM級で優勝し、L級で島屋八生(日体大)とMH級で上島政隆(名城大)が共に2位に入賞。

三重国体では吉田建規(小浜消防署)M級で2位。L級の島屋八生(日体大)と上島政隆(名城大)が3位に入賞し、諫早農高OBの活躍が目立った。一方、全国高校総体(山梨市)では、諫早農業高校が団体で4位入賞。

昭和51年

全日本選手権大会で、吉田建規(諫早消防署)がM級で二連覇達成。上島政隆(名城大)もMH級で3位に入賞。全国高校総体(豊科町)では、吉田惣治(諫早農業)がL級で3位に入賞した。続く佐賀国体においては、少年の部F級の高以良祐治(諫早農業)と吉田惣治(同)が共に3位に入賞。同大会において惣治の兄である吉田建規(諫早消防署)が成年M級で優勝し、Jにおいて173kgを挙げ、日本新記録のおまけまでつけた。

昭和52年

この年より体重制の名称が変更され、kg級という形で表示、呼称されることになった。日ソ対抗を兼ねた全日本選手権大会では、吉田建規(諫早消防署)は3位。日本選手では2位となる。続く青森国体では82.5kg級で優勝。Jの特別試技で185.5kgの日本新記録を昨年に続き樹立する。2年連続の日本新記録の樹立は立派というほかに、千葉がない。全国高校総体(高梁市)では、澤久政治(諫早農業)が67.5kg級で7位に入賞した。

昭和53年

長崎国体で吉田建規(県央消防署)が成年82.5kg級で三連覇達成。少年67.5kg級で吉田和久(諫早農業)が3位に入賞し、兄弟そろっての入賞で新聞などを賑わす。全国高校総体(鶴岡市)では前述の吉田和久(諫早農業)が67.5kg級で2位に入賞。しかし、この2位は体重差によるものだけに残念であり、蟬が木から落下するという、うだるような猛暑と共に悔しい思い出となった。

昭和54年

宮崎国体において、吉田建規(県央消防署)が82.5kg級で310kgと記録を伸ばして4連覇達成。1回優勝するだけでも大変なことなのに4連覇とは実に素晴らしいことであり、県協会関係者の喜びと共に県民の誇りとなった。また同国体で弟(二男)吉田惣治(日体大)も90kg級で3位に入賞し、昨年に引き続いての対象こそ違え兄弟そろっての上位入賞に地元新聞の記事を賑わした。一方、高校生は全国高校総体(明石市)で酒井勝則(諫早農業)が56kg級で8位に入賞。67.5kg級斎藤辰朗(同)が7位入賞。期待どおりの結果は出せなかったが好選手が揃う次年度へ期待をつないだ。

昭和55年

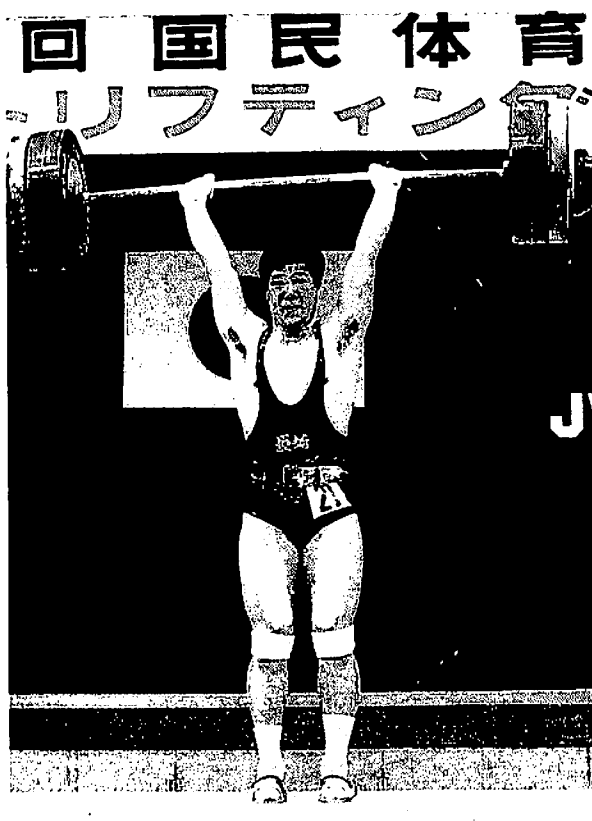
全日本学生選手権大会で吉田惣治(日体大)が82.5kg級で3位に入賞。全国高校総体(新居浜市)は、団体4位入賞。3位以内入賞を期待していただけに上位入賞の壁の厚さを痛感した。個人では、67.5kg級で上島春喜(諫早農業)が2位。同階級で久保(舞子)とハイレベルの争いの結果、体重差の負けであったが爽やかな敗北感であった。

栃木国体では上島兄弟がそろって出場し、弟の上島春喜(諫早農業)が少年67.5kg級で優勝し、高校総体の雪辱をはたす。一方、兄の上島政隆(小浜消防署)は成年100kg級に出場し、3位に入賞。ここ数年、吉田三兄弟、上島兄弟の活躍が目覚しく、本県のウエイト界を各兄弟で背負った格好になった。

昭和56年

全体的に低調な年で、国体は下位入賞のみで盛りあがり欠ける年であった。その中で孤軍奮闘したのが安永浩助(諫早農業)で、全国高校総体(水上町)では52kg級で2位に入賞。続く滋賀国体で失敗しながらも52kg級において4位に入賞。彼は1年時の後半から入部し、この短期間の中に上位入賞をした非凡な才能に驚かされる。

昭和57年



昭和60年、鳥取国体75kg級優勝の上島春喜

全日本学生選手権大会で82.5kg級に出場した吉田和久(日体大)が優勝。また、同大会で75kg級の上島春喜(日体大)が2位に入賞。全日本選手権大会で82.5kg級に出場した吉田惣治(県立久原養護学校)が3位に入賞した。

鳥根国体では成年75kg級で上島春喜(日体大)が2位に入賞したが、その他の選手の活躍は今ひとつであった。

高校生は全国高校総体(牧園町)において個人の2・3人に期待したが、その中で75kg級の野中弘則(諫早農業)が6位に入賞したにとどまった。

昭和58年

アジア選手権大会で上島春喜(日体大)が75kg級で3位に入賞。いよいよ世界へ向けてのスタートとして県協会あげて期待した。群馬国体では、吉田(惣治、和久)・上島(政隆、春喜)の二兄弟4人が揃って入賞した。しかし、上島春喜の5位入賞が最高で、全員が下位入賞であった。また、少年の部では56kg級に出場した市田英昭(諫早農業)が健闘して3位に入賞し沈滞気味の高校に大きな刺激剤となった。

昭和59年

全日本選手権大会兼ロサンゼルス五輪代表選考会で上島春喜(日体大)が82.5kg級に出場。2位にとどまり惜しくも代表権を逸してしまう。

全日本学生選手権大会では上島春喜(日

体大)が75kg級で優勝し、実力を徐々に付け県勢の牽引的存在となる。奈良国体では、75kg級で上島春喜(日体大)と90kg級で吉田惣治(諫早農業教諭)が共に3位になり、惣治の弟、吉田和久(日体大)が82.5kg級で5位、春喜の兄、上島政隆が100kg級で7位と昨年に引き続き兄弟4人全員の入賞となった。一方、少年の部では56kg級の松尾徳男(諫早農業)が2位に入賞。

昭和60年

鳥取国体において、この年は吉田和久が故障で出場できず、二兄弟4人組

の揃い踏みはこの年で途絶えることになった。その中で上島兄弟は健在で、弟の上島春喜(大村養護学校教諭)は75kg級で優勝し、兄の上島政隆(小浜消防署)は100kg級で5位に入賞した。また、昭和56年時、少年の部に出場してから4年振りに成年の部に復帰した安永浩助(玉之浦消防署)が52kg級で4位に入賞。この入賞は、福江島という離島の地に勤務し、時折、強化合宿等に参加するのみで、後は指導者不在の中、また不十分な練習道具、練習場で一人黙々と練習した成果であり、彼のウエイトリフティングに対する情熱と熱意に敬服し、恵まれた条件で練習している一般選手等への大きな刺激となった。

昭和61年

全日本選手権大会兼アジア競技大会予選75kg級で上島春喜(県立スポーツ研究指導センター)が2位になり全日本の代表に。ただし、エントリーの関係で競技には出場せず。日韓親善大会に上島春喜(県スポ研)が75kg級で出場し優勝。また、山梨国体においては、成年75kg級で上島春喜(県スポ研)が2位に入賞。前述の安永浩助(玉之浦消防署)が52kg級で8位に入賞する。この年から常時出場していた上島政隆が引退し、大きな世代交代の時期に入った。高校に目を向けると、期待されていた個人選手が予想外の失敗で誤算の大き

い年であった。しかし、3月藤沢市で開催された全国高校選抜大会に田中俊宏(諫早農業)が推薦され健闘した結果、75kg級で7位に入賞した。

昭和62年

全日本学生選手権大会で市田英昭(九州協立大)が60kg級で3位に入賞。沖縄国体では上島春喜(県スポ研)が75kg級で4位に入賞したが、世代交代の落差は大きく、戦力的に一步二歩後退の形となり、全日本学生選手権大会3位の市田。全日本選手権大会で60kg級に出場し4位に入賞した松尾徳男(日体大)ら学生陣の成長が待たれるところである。高校関係に目を向けると県内では県高校総体において無敵の団体戦20連勝を続けていた諫早農業高校が、新興チームの諫早東高校に敗れる波乱が起きて諫早東高校が初優勝。

18年間、諫早農業高校で監督として県の中心選手の全てを育成し、諫早東高で再スタートを切った篠崎義雄(現五島高校教諭)が、師弟対決で恩師の貫禄を示した時でもある。また、諫早東高校以外に、その後、西彼農業高校の檜頭などを考えると県高校ウエイト界の一つの大きな転換期の年といえよう。

昭和63年

全日本選手権大会の75kg級で上島春喜(県スポ研)が初優勝。オリンピック出場に期待を寄せたが、残念ながら標準記録に達せずソウル五輪の出場は成らなかった。全日本学生選手権大会の60kg級で松尾徳男(日体大)が優勝。全国高校総体(洲本市)では、67.5kg級の峯本孝光(諫早農業)が8位に入賞しただけで収穫のない年となった。

京都国体においては、少年52kg級で梅崎昭夫(諫早農業)がJ種目で7位に。67.5kg級で峰本孝光(諫早農業)がS種目6位、J種目で7位に入賞。75kg級で井手真也(諫早東)が8位。成年では60kg級で松尾徳男(日体大)がS・J種目とも7位に。75kg級では上島春喜(県スポ研)が活躍し、J種目で優勝、Sで3位に入賞した。

平成元年

長崎県ウエイトリフティング協会の役員改選があり、本年5月より理事長に篠崎義雄(諫早東教諭)。副理事長兼事務局長に浜崎芳宣(県緑地協会)が就任し新スタッフでスタートした。

全日本選手権大会で松尾徳男(久原養護教諭)が60kg級で2位に入賞。

北海道国体では、少年52kg級で酒井正重(諫早農業)がJ種目で8位に入賞。成年60kg級では松尾徳男(久原養護教

諭)がS種目7位、J種目3位に入賞。75kg級上島春喜(県スポ研)はS種目で2位、J種目で優勝した。全国高総体(上板町)では、個人の部で67.5kg級に出場した松本省三(諫早農業)が8位入賞。また、全国高校選抜大会に同選手が67.5kg級に出場し、6位に入賞する。

平成2年

福岡国体では、成年75kg級で上島春喜(県スポ研)がS種目3位、J種目4位に入賞。全国高校総体(村田町)では52kg級で堀尾英輝(諫早農業)が4位。同階級で田中基(諫早東)が8位に入賞。また堀尾は全国高校選抜大会(日川市)で52kg級で8位に入賞した。

平成3年

石川国体で、成年75kg級で上島春喜(県スポ研)がS種目4位、J種目で2位に入賞。少年82.5kg級では松崎博信(諫早東)がJ種目7位に入賞。全国高総体(清水市)緒方宏至(諫早東)が60kg級で5位に入賞。また、同選手は全国高校選抜大会(金沢市)に出場し、60kg級で5位に入賞。なお同階級の藤瀬俊明(諫早東)は惜しくも失格した。

平成4年

山形国体で成年60kg級において松尾徳男(希望ヶ丘養護教諭)がJ種目8位。75kg級で上島春喜(諫早農業教諭)がS種目5位、J種目で4位に入賞。少年では、56kg級で早田康一(諫早東)がJで7位に入賞。全国高校選抜大会(瀬戸市)には3名出場。全て64kg級にエントリーされ、溝永大助(西彼農業)が4位。井手政文(諫早東)が8位に入賞し、小松祐一(西彼農業)は惜しくも失格。

平成5年

四国国体で成年60kg級松尾徳男(希望ヶ丘養護教諭)がJ種目で7位。76kg級で上島春喜(諫早農業教諭)がS種目3位、J種目2位に入賞。少年64kg級で溝永大助(西彼農業)がS種目2位、J種目2位と大健闘。70kg級井手政文(諫早東)はJ種目で7位に入賞。全国高校総体(小山市)では64kg級溝永大助(西彼農業)が6位。70kg級で井手政文(諫早東)が7位にそれぞれ入賞。全国高校選抜大会(石岡市)では70kg級に小川土雄(西彼農業)が4位出場し2位に入賞。全国高校総体へ夢をつないだ。また一般では、全日本社会人大会(瀬戸市)に「諫早クラブ」として初参加。団体4位。個人で59kg級堀尾英輝4位。64kg級松尾徳男2位。76kg級上島春喜1位

県高総体および高校新人戦優勝校一覧

年 度	高 総 体	新 人 戦
昭和40年	長崎西高校	諫早農業高
昭和41年	佐世保北高	諫早農業高
昭和42年	諫早農業高	諫早農業高
昭和43年	諫早農業高	諫早農業高
昭和44年	諫早農業高	諫早農業高
昭和45年	諫早農業高	諫早農業高
昭和46年	諫早農業高	諫早農業高
昭和47年	諫早農業高	諫早農業高
昭和48年	諫早農業高	諫早農業高
昭和49年	諫早農業高	諫早農業高
昭和50年	諫早農業高	諫早農業高
昭和51年	諫早農業高	諫早農業高
昭和52年	諫早農業高	諫早農業高
昭和53年	諫早農業高	諫早農業高
昭和54年	諫早農業高	諫早農業高
昭和55年	諫早農業高	諫早農業高
昭和56年	諫早農業高	諫早農業高
昭和57年	諫早農業高	諫早農業高
昭和58年	諫早農業高	諫早農業高
昭和59年	諫早農業高	諫早農業高
昭和60年	諫早農業高	諫早農業高
昭和61年	諫早農業高	諫早農業高
昭和62年	諫早東高校	諫早農業高
昭和63年	諫早農業高	諫早農業高
平成元年	諫早農業高	諫早農業高
平成2年	諫早農業高	諫早東高校
平成3年	諫早東高校	諫早東高校
平成4年	諫早農業高	諫早東高校
平成5年	西彼農業高	諫早東高校
平成6年	諫早農業高	諫早農業高
平成7年	諫早農業高	西彼農業高

の結果を得る。

平成6年

愛知国体では成年64kg級で松尾徳男(希望ヶ丘養護教諭)がJ種目で8位。76kg級上島春喜(諫早農業教諭)がS種目6位。J種目3位に入賞。少年70kg級の小川土雄(西彼農業)はS種目4位。J種目3位。76kg級内田友和(諫早東)はJ種目において6位に入賞した。なお、小川は全国高校総体(滑川市)で3位にとどまり、個人優勝の夢は破れた。全国高校選抜大会(亀岡市)では諫早農業の2名が4位出場し、64kg級で永瀧和人が7位。76kg級で岩村征和が8位に入賞した。

平成7年

福島国体では成年64kg級で松尾徳男(希望ヶ丘養護教諭)がJで8位。83kg級で井手真也(自営)がSで4位に入賞したが、上島春喜の抜けた穴は大きく今後の強化策に大きな課題を残した。一方、少年は国体で64kg級永瀧和仁(諫

全九州高校大会3位以内入賞一覧(団体)

昭和42年度	優 勝	諫早農業高
昭和43年度	第2位	諫早農業高
昭和44年度	優 勝	諫早農業高
昭和45年度	第2位	諫早農業高
昭和46年度	優 勝	諫早農業高
昭和47年度	優 勝	諫早農業高
昭和48年度	優 勝	諫早農業高
昭和49年度	第3位	諫早農業高
昭和50年度	第2位	諫早農業高
昭和51年度	第3位	諫早農業高
昭和53年度	優 勝	諫早農業高
昭和54年度	優 勝	諫早農業高
昭和55年度	優 勝	諫早農業高
昭和56年度	優 勝	諫早農業高
昭和57年度	第3位	諫早農業高
昭和58年度	第3位	諫早農業高
昭和59年度	第2位	諫早農業高
昭和61年度	第2位	諫早農業高
昭和63年度	第3位	諫早農業高
平成2年度	第3位	諫早農業高
平成3年度	第2位	諫早東高校
平成7年度	第3位	諫早農業高

九州選手権大会(一般団体)3位以内入賞一覧

昭和52年度	第2位	長 崎 県
昭和54年度	第3位	長 崎 県
昭和57年度	優 勝	長 崎 県
昭和58年度	優 勝	長 崎 県
昭和59年度	優 勝	長 崎 県
昭和60年度	第2位	長 崎 県
昭和61年度	優 勝	長 崎 県
昭和62年度	第3位	長 崎 県
平成元年度	第2位	長 崎 県
平成2年度	第3位	長 崎 県
平成4年度	第3位	長 崎 県
平成5年度	第3位	長 崎 県
平成6年度	第3位	長 崎 県
平成7年度	優 勝	長 崎 県

早農業)がJで7位。76kg級岩村征和(同)がS・J共に5位に入賞。

全国高校総体(岩美町)では64kg級で永瀧和仁(同)が8位に入賞する。

全日本社会人大会(東広島市)では団体8位。個人では59kg級で堀尾英輝(長崎労基)が4位。83kg級で井手真也(自営)が4位。同級で上島春喜(諫早農業)が5位に入賞した。

<現役員>

会 長	藤本 勝吾	
副会長	前田 重寛	平石 英利
顧問	堤 武男	堤 隆宜
理事長	篠崎 義雄	
副理事長兼事務局長		浜崎 芳宜
理事兼強化部長		吉田 建規
理事兼普及部長		上島 政隆
理事兼競技委員長		吉田 惣治
監 事	岩永 勉	高以良祐治

熊本県

事務局 〒862 熊本県熊本市九品寺町3-1-1 鎮西高等学校内
古瀬 健司 TEL 096-364-8176

〈沿革〉

協会設立以前

昭和32年5月7日、鶴屋テパートにて福岡、大分、熊本、三県で九州選手権大会が開催された。この日が本県においての最初の大会である。数日前から新聞、ラジオで宣伝され、会場は満員だった。九州では福岡県だけが協会登録されていた。大分、熊本は愛好者達がグループ単位で練習をやっていた。

翌昭和33年7月6日、福岡県北九州市小倉、砂津体育館で三県の九州大会が実施され、本県から5名の選手が出場した。Fe級で初めて本県の村本鉄也が優勝し、熊本日々新聞に大きく載り、この日を機に愛好者グループが活性化、本県の協会設立の準備を進める事となった。ボディビル兼リフターの愛好者も20名位がいた。

協会創立に至る経緯

昭和35年の第15回国体が熊本県で開催決定し、ウエイトリフティング競技が宇土市で開催されることが判明。近々宇土市が協会設立する等との事。愛好者にも宇土市から呼びかけがあるだろう。数ヶ月後の昭和33年秋、宇土市は各方面に選手養成と人員確保の要請をお願いし、特に熊本市内に選手が集中していた関係上、国府町の井上ボディビルセンターを通じて愛好者グループに連絡し、又宇土市近郊の町村から力自慢の青年達を集めた。

中央から井口理事長、飯田理事、北九州大学の美山豊先生、北九州大学生を招き、市役所職員、地元体協関係者等、研修会並びに合宿を実施し、役員、選手の養成を始めた。翌年昭和34年2月26日協会設立、4月1日、日本協会に加盟した。本部は宇土市役所内に置き、急ピッチで国体開催の為の準備をし、会長に市長の大和忠三、理事長に教育委員会の馬場学、監督に職員の松尾快治等々人事面においての体制をし

き、初代役員が決定した。

〈年次別概況〉

本県の数少ない競技人口の中で、協会設立以来、全国大会の優勝者だけを種別毎に紹介する。

〈国民体育大会〉

小年の部

昭和35年 荒木 光次 M級
昭和41年 今村 実 F級
昭和45年 後藤 節哉 B級

〈全国高等学校総合体育大会〉

昭和38年 野田 澄男 F級
昭和39年 野田 澄男 Fe級
昭和40年 今村 実 F級
昭和41年 今村 実 F級
昭和45年 後藤 節哉 B級
昭和62年 瀧本 誠一 100kg級
平成3年 本田剛四郎 90kg級
平成8年 諏訪 忠 91kg級

〈全国高等学校選抜大会〉

昭和62年 瀧本 誠一 110kg級
平成3年 本田剛四郎 90kg級
平成8年 諏訪 忠 91kg級

〈全国中学生選手権大会〉

平成3年 倉岡 伸二 48kg級
平成4年 三井 靖彦 48kg級
平成5年 前坂 誠貴 46kg級
平成5年 松本 崇宏 50kg級
平成5年 諏訪 忠 70kg級
平成7年 速水 雅浩 54kg級
平成7年 酒井 宗俊 59kg級
平成8年 松崎 泰裕 54kg級

〈女子国体記念杯高校の部〉

平成5年 諏訪 治子 54kg級
平成7年 大和 佳恵 59kg級

〈全国女子高校選抜大会〉

平成6年 諏訪 治子 59kg級
平成7年 高田 恵美 54kg級
平成7年 大和 佳恵 59kg級

〈全日本マスターズ選手権大会〉

平成6年 村本 鉄也 64kg級①

本県の競技概況は国体抜きで語ることはできない。昭和35年度熊本国体前後と2回目の平成11年第54回国体熊本

歴代会長

- 初代 大和 忠三 (昭和34年～)
- 第2代 岩永 一喜 (昭和39年～)
- 第3代 金子勝之助 (昭和47年～)
- 第4代 江頭 幹治 (昭和62年～)
- 第5代 村上 寅美 (平成4年～)

大会の近年は、色々な機関の動きもあって活発化する。特に行政面での影響は大きく、財政及びび人事の面での手助けは多い程良い。競技力向上と活性化の為に絶対必要だ。

協会設立当時、将来への大きな夢を描き競技人口の増加を目標にPRし、各地域毎に自らグループができた。宇土市では元酒屋の倉庫を利用、熊本市方面では元三町に20人位、本庄町に数名、坪井町その他個人々々が自主的に練習した。県下全般での競技人口は70人位に迄になった。登録人口は30名前後だったのは、他の選手は普段はボディビルの練習をし、試合前に三種目の練習をする程度だった。だから県内の大会にはウエイトリフティングの試合とボディビルのコンテストを同時に行う事もたまにはやった。

P級はボディビルの選手が有利で、のちに熊本県ボディビル協会の会長を務められたB級の桃山和幸氏は、ベンチPを200kg挙げられ、ギネスブックに載るべき人もいた。

又、Fe級の池田選手は、P85kg、J82.5kgとPの方が上廻る選手も出現、多種多様なフォームと個性あふれる選手がいっぱいだった。技術でも程遠い者ばかりの選手がただ三種目をルール通りに成功させようと一生懸命競技した。服装もまちまちで、Tシャツを改造したり、もちろん半ズボン姿や、毛糸で編んだタイツやら、シューズは運動靴は当たり前、地下タビ、ボクシングシューズを底上げ改造する等々、現在の整理されたスマートな服装とは想像外の状況でルール通りにはとてもできない様な有様で、膝迄の地下タビの人等、滑稽極まる風景で会場は賑やかで楽しかった。

もちろん器具も正規のバーベルは宇土市以外ではある訳がなく、セメントを固めたり、荷車の車輪を改造し、シャフト等は近くの鉄工所から貰い、県内の鋳物工場が造ったボディビル用バ

ーベル等、プレートも正確な重量ではなくシャフトの太さもまちまちで、落とすと曲り、それぞれが手造りの器具で練習をし、それでも何一つ苦勞したと感じた事はなかった。

協会設立時から現在迄、関係者はもちろんの事、第三者の協力と地域の理解が現在の組織を形成している事は言う迄もなく、協会の歴史を語る時、記すべき事が沢山ある。

前記のように各クラブ共、器具不足で悩んでいた。特に村本鉄也を中心の元三町グループは県下最大グループで、3割強の20数名が自宅広場で雨天以外は交代で練習し、ウエイトリフティング用のバーベル1セットだけでも欲しかった。宇土市のバーベルは持ち出し禁止で使えない。宇土市に行くには自転車で行くのは40分かかる。しかし正規のバーベルの練習も必要だ、もちろん金は無し、現在のようにクレジット等ローンで購入できる時代ではなく、地元の有志達に相談もした。なかなか良い返事が来ない。バーベルを買いだいたいから金を下さい、と頼むだけで見返りは何も無いのに出す人はいない筈だ。それでも諦めず、誰にでも金を無心した。そんなガムシャラな村本の事を聞き、相談に乗ってくれる人がいた。熊本市川尻町青年学級学長で、現在も86歳で健在の添島喜好先生だ。違った事もなく、名前も知らなかった先生から、学級生を通じて逢いたい旨の連絡があり、学校に行った。私達グループの熱意を感じとられ、どれ位の金額が必要なのか聞かれ、5万円はほしいと答えたら、どうにか都合しよう、という返事が来た時の感激は現在でも思い出だけでも体が震える。しかし条件があった。その条件こそ熊本県が設立以来中学生の指導に努力してきた源だったような気がする。

昭和34年頃の県内の高校卒の初任給が6000円位の時、5万円は大金だ。その金を大事に使う為に色々考え、バーベルも上坂の正式なバーベルと同じ効果があれば良いので、鉄工所に相談して安い金額で造って貰う事にし、シャフトは堅くてしなりのある鋼材は真似できないので、SS55の堅くて32%の大きい鋼材を使用し、当時のベアリング式だったので容易に製造できた。

又、リングは、熊本市交通局から電車の枕木の廃材木を貰い、スクワット台も木材を積み重ねて利用する等工夫し、ベンチ台も同様な方法で色々考えて利用した。宇土市周辺の選手以外で

はどここのグループも正規の器具がない為、ボディビル用のバーベルを使ながらの練習なので、Sはほとんどできない状態で、PとJだけになっていた。元三町のグループは思い切ってSの練習ができるようになった。

青年学級からの5万円支出名目は、青少年の補導及び育成費として計上しなければならないので、添島先生は苦慮された結果、夜の港をうろつく少年達、俗にいう不良気味の青少年を悪の道に進まないよう、ウエイトリフティングの指導をしてほしい、そうする事で面目が保てるとの事。元三町グループはその一環として、トレーニング場を川尻警察署内に移し、主に中学生を集め本格的な練習に入った。その影響のせいで県内各方面に中学生のリフターが誕生し、一般、高校生と共に合宿にも参加させるようになった。もちろん協会も承知で、馬場理事長の深い理解で積極的に取組んだ。ウエイトリフティング競技は中学生は全国的には指導されていないのはなぜか？ という疑問はあったが、我々は逆に文部省や教育委員会の考え方の古さを無視した。

この競技は未成熟の少年には身体に与える影響が過激すぎ、支障を起こすおそれがあるので危険なスポーツだと決めつけている。特に関節等に負担が多く身長伸びが悪くなるのではないかと考えられている。では他の競技を参考にすれば良いのではないかと考えて、バスケットやバレーボールはジャンプによる関節への負担、相撲や柔道はより大きい衝撃がある筈、ならばそれ以内位の負担で済む練習をすればよいのではないかと。

知識を得る為多くの資料を集め勉強した結果、練習と食事方法の我々独自の結論を出した。逆に身長を伸ばす練習で世の常識をくつ返してやろうと思いい、自信を持って中学生を指導した。身長を伸ばす食事とはバランスのとれた食事と、高質の蛋白質、カルシウムを多くとる事と、カルシウムはとり過ぎてはいけない事が分かり、しかも瞬発力を増す為、白身の多い魚類、肉等を食べた方が良い。しかも適度な運動が必要であるとの結論だ。理想的な食事は経済的に困難なので、負担の軽い大豆等を利用し、豆乳等を飲みながら理想的な食事に近づけるよう指導し、又練習は軽い重量でフォーム及びテクニックを主体にして、若い身体に将来リフターとして筋力が十分に力を発揮できるように方法を取り、未来に成果

を残す事に期待した。

昭和35年第15回熊本国体、少年の部M級で優勝した荒木光次は、協会設立以前の2年前、昭和32年中学3年生の時前から前記した方法でトレーニングし第1号選手として成功した良い例である。現在の中学生の指導方法並びに採点方式は、40年前の昭和32年頃から熊本県では実施していた事になり、正しい指導方法だった証明になる。

野田澄夫、今村実等次々と優秀な選手が続いた。しかし最近少々の疑問を持ちはじめた事がある。それは中学生に重い重量を要求する傾向にある事だ。高校時代は良い成果を残しても、大学、社会人になって伸びが止まる選手が出はじめた事を心配する。初心に戻って40年前に我々が考えた方法をもう一度見直す時期かもしれない。

その他本庄町の宮村グループ、坪井町の桃山グループ等々沢山苦勞話やエピソードがあるけれど、設立当時の思い出を一つだけ紹介します。

熊本国体を間近に控えた宇土市は、多種の分野で急ピッチで準備を始めた。特に選手育成の面では2ヶ月に一度の割合で合宿を実施し、地元宇土高校に県下で始めてクラブができ、高校生の育成も同時に行い、中学、高校、一般と合同合宿し、特にクラブの無い鎮西高校、熊本高校、済久高校、天草農業高校、天草高校と県下各地から合宿に参加した。

昭和34年第14回国体東京大会に本県から始めて4名の選手を派遣するまでになった。監督に松尾快治、F級山神裕親、B級桃山和幸、Fe級村本鉄也、L級熊井光春だ、入賞者はいなかったが、この体験が後日協会発展のステップの土台となった。設立年度34年度はスタートの年として非常に有意義で学ぶ事が多かった。

いよいよ35年、熊本国体の年が明け、残り10ヶ月間で強い選手を育成しなければならない。矢部町出身のH級の現役選手で自衛隊員の中村一哉が埼玉県に在住している事が分かり、熊本県の自衛隊に配属してもらい、本格的な強化が行われる事になり、コーチ兼選手として県内選手の面倒を見ながら自らも優勝目標に練習し、協会の中心的存在となり、各グループ毎に指導するなど、強化の為に尽くし、又馬場理事長の相談相手としても県内のまとめ役となった。その他高校生の荒木光次が優勝候補だった為、寝食を供にする事もしばしばで、昼夜を問わず貢献し、選

手違からは良き先輩として慕われた。北九州大学の部員との合同合宿も度々行い、県内選手のレベルも日毎に上達し、同時に中央からの指導で、審判員の養成並びに役員の指導も順調に進み、いよいよ国体開催の秋を迎えた。

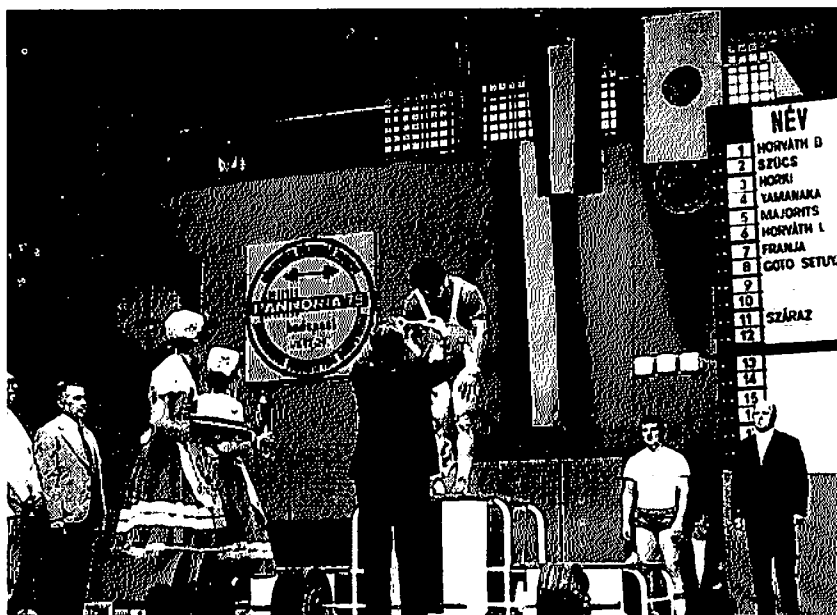
各学校の運動会にも出向いたりPRの方も機会ある毎に行い、昼食時間等を利用して理解して貰う事も忘れなかった。昭和35年10月23日国民体育大会幕開けた。開会式当日の午後から高校M級の試合が始まり、地元荒木光次が優勝し、地元は沸いた。翌日の熊本日々新聞の一面に大きく写真掲載され、初の金メダルと報じられ最高のスタートを切った。各県の選手との交際もでき、成功した大会だった。H級の中村選手は2位、桃山選手が入賞し、他の選手もベストを尽くした。

国体終了後、役員は解散し、選手達も生活の為に仕事に集中しなければならず、宇土高校の生徒と一般の選手も10名位に減り、他の者は元のボディビルの練習に変わり、県内大会も開けない位になった。宇土市に数名と本庄町の宮村グループが5名位、多勢いた村本グループでも一般5名、中学生も3名になった。一方役員も馬場理事長一人の状態、協会も潰れそうになっていた。協会設立も国体のため無理にできたようなもので、選手達の想いとは逆方向に進んだ。ただ他県との付き合いやメンツの為に存在するに過ぎない。

役員も行政的に組織されて選手達と年齢の差や考え方のギャップがあり、ただいららするばかりで、どうしようもない状態だ。幸い翌年昭和36年4月1日、鎮西高校にクラブが創設され、県内に2校の高校ができたのがせめてもの救いである。

中学生指導は続いていたので、ほとんどが鎮西高校に入学して少数ながら優秀な選手が続き、昭和38年、39年と連続して野田澄夫が全国高校総体で優勝し、効果は徐々に現われ出した。中学生育成の効果はしばらく続く事になり、昭和40年、41年今村実が全国高校総体連続優勝し、41年大分国体ではF級Jで122.5kgのジュニア世界新録を出し、表面上は熊本王国の到来かと協会の実情とは逆の良い方の結果が続出した。もちろん数年間は中村一哉の指導があり、他にも上位入賞者が宇土高校からも出た。昭和45年全国高校総体と国体で後藤節哉が二冠を達成し、まだまだ続いた。

しかし競技人口は減少する一方で県



モスクワ・オリンピック代表に選ばれた後藤節哉

体育協会も危惧していた。中村一哉も県外に去り、元選手達は30歳代になり、世の中枢として働き、会社を開設する者や生活の為に時間を費し、いつか誰かが協会を率先し立て直してくれるだろうか？ と甘く考えていた。

昭和46年和歌山国体の時、本県選手達が、協会立て直しを早くしてほしい、このままでは潰れるのではないかと心配している姿を見た時、選手達の心をそこまで追い詰めてしまっていた事に、先輩達がしっかりしなければならぬ。高齡の馬場理事長一人で必死に守ってこられた協会を潰す訳にはいかないと考え、昭和36年11月県立武道館の会議室に11年振りに約80人位集合し、討論した。先ず人事面から取り組む事になり、山神、桃山、村本、荒木の4名が代表し、馬場理事長宅へ報告しに行った。

数週間後、会長以外の新役員が内定した。顧問・馬場学、副会長・仲武利、理事長・菊池文融、事務局・諏訪忠治、代表理事・村本鉄也。他の理事は会議等に出席する人を、その時の理事とする方式をとった。

昭和47年4月1日、第3代日会長に金子勝之助が決定し、協会再出発の日となった。一方鎮西高校の江頭幹治先生は、県体協の理事等多忙は承知の上副会長にお願いし、相談相手になって頂いた。先生は特別な存在で、永年協会運営の面の相談役だった事は言うまでもない。

金子勝之助新会長以下、菊池文融理事長を中心に再度協会運営の車輪が徐々に始動しはじめた。県内大会も頻

繁に実施し、選手数の増員も計り、九州大会にも7～8人の参加が可能になり、審判員も増加し、役員も充実した。

財政面では、県体協補助金が最大の収入源で、年間20万円位と会員費の数万円では足りない訳がない。賞状とメダル及び経費、負担金で不足する。当然関係者は自費で参加した。九州大会を県内で開催する時が財政確保の大きいチャンスなのだ。200万円近い寄付金を集め、パーベル等必要な器具をその都度買った。昭和55年本県出身の後藤節哉選手が、モスクワ・オリンピックの代表にFe級で選ばれ、待望のオリンピック選手が出た。又トレーニング場も昭和56年に熊本市八幡市に建築し、唯一の協会練習場としてオープンした。

鎮西高校に優秀な監督が就任した。古瀬健司である。野中光俊をはじめ次々と日本チャンピオンを誕生させ、現在も県協会の中心となって活躍中である。

昭和59年、熊本県選手権大会を開けるまでに選手層も厚くなり、この大会を第1回大会とした。平成元年、第54回国民体育大会熊本大会準備の為、県教育委員会に国体推進室ができ、我が協会も国体の為の準備に取り組む事とした。

平成2年国体準備局設置と同時に役員改正を行った。現役員表の通りである。平成4年天草西高等学校に創部、家吉哲理が就任、又先生は技術研修の為に平成6年4月1日から半年間東京に出張される。国体会場が鏡町に内定した為、地元の八代農業高校が平成6年4月1日、創部し、海崎良仙が宇土高

校から転任され、県下4高校となる。平行して、中学・女子の部の強化も行い、特に女子は諏訪治子の影響が大きく、後輩達が続いて、村上寅英会長以下、総力を挙げて国体成功の為努力している。

平成8年4月1日、八代郡鏡町に国体準備局が設置され、協会も全面的に鏡町と合体して協力し、2回目の大きな山を越えなければならない。平成11年10月を目標に国体が成功するよう頑張りたい。近年は補助金も多額で、選

手強化も十分できるようになった。しかし過去の苦しみを忘れず、器具も最小限の出費で済ませよう、ほとんど手作りの物が多い。国体終了後、二度と谷間に落ちないように色々な面で次代の役員が苦勞す勞力を除き、ますます協会発展に注げよう、現役員が考える義務があると思う。瞬間的に熊本国体で良い成績を残すより、高いレベルの協会発展の方が望ましい。

協会の歴史を述べる時、莫大な語字が必要な事が分かった。ほんの一部

で大事な事だけを抜粋して記してみた。

〈現役員〉

会 長	村上 寅英			
副 会 長	菊池 文融	船井 光春		
理 事 長	村本 鉄也			
理 事	中村 良造	諏訪 忠治		
	田尻 充	古瀬 健司		
	松本 春作	園田 幸		
	海崎 良仙	片岡 裕二		
	関本 郁夫	関 輝明		

◎ 大分県

事務局 〒870 大分県大分市田ノ浦8組
星野 忠人 TEL 0975-32-5010

歴代会長

初代 佐藤 文生 (昭和36年～)

〈沿革〉

協会創立以前

時代は戦後間もないヘルシンキ・オリンピックに只一人出場し失格した白石選手の報道はリフターを夢見る多くの若者を刺激した。その中の一人に武藤がいた。模索の彼に親切的な指導を与えたのは協会の内藤義治氏であった。武藤が理解に困ったのはSのスクワットについてであった。図解付きの手紙の往復によってその技術は伝えられた。昭和27年(ヘルシンキ大会)直後、大分市の興南鉄工所製作のバーベルは上坂のそれに劣っていたが、高校生の自主トレには充分であった。彼は森高校の陸上部員を招集し、ウエイトトレーニングを始めると、P60kg以上J90kgをこなす生徒も出はじめた。

昭和30年に日出高校に転動した直後、部を創設し平市公会堂と札幌市丸山小で開催された全国高校総体には2名ずつを派遣した。また昭和32年には九州大会を誘致し、北九大のリフターも加わり33名が出場した。萩尾はJ105kgを挙げ未公認ながら日本新を出した。大会運営で最も重要なことは公認バーベルが備わっているかどうかであった。武藤が上坂から1セット購入し、中島は所有のセットを競技会場に持参した。また翌年の東京アジア大会に備えて冬期合宿が別府市温泉プールで開かれ、美山、遠藤コーチ以下、萩尾、木暮、大沼、加藤、黒川、窪田、瀬山らの候補が連日汗を流した。まもなく九州大会も各県からの参加者も徐々に増加し軌道に乗ってきた。大分県も熊本国体(35年)が迫った頃から未普及種目を体

協に加え、やがて来るべき大分国体に備える気運が見えはじめ、組織的にウエイト協会もその骨組みに取りかかることになった。

こうした過渡期にあって北九大出身の中島は協役として大分県協会設立の陰の力となった。

協会創立に至る経緯

武藤は森高校に在任中(28～30)、日体協傘下にJWAのあることを知ったので時至るに及んで正式加盟することになった。36年4月に県体協とJWAとの加盟が終り、熊本国体からは少ないながら4名の選手を派遣し只参加するという域を出ることはなかった。県会長には当時県会議員の佐藤文生を選び快諾された。現在に至るまで氏は当協会のために盡力された。佐藤会長の選出に当っては別府市役所の足立課長



昭和41年、大分国体で2位に入賞、表彰台に立つ一般M級木下



大分国体一般Fe級プレス競技で92.5kgに成功した長久(8位入賞)

の世話がいった。県体協への加盟以前には普及のための講習会開催、JWA主催のコーチ会議への参加などで中心になる役員は東奔西走した。それと同時にリフターとしても実技を体得しなければならなかった。しかし現在と同じ状態になるためには施設、器具、選手養成等の諸問題が山積みし続け行政の援助を待たなければならなかった。理事中島は中学校から高校へと転動した事は国体の高校の部育成に期待された。

〈年次別概況〉

昭和35年(熊本国体)

この年正式に大分県協会は、県体育協会の傘下に加えしたので、熊本国体に4名の選手を派遣した。F級今井、B級中島、L級武藤、M級藤内は何れも入賞せず、参加のみにとどまった。会場宇土高校。

昭和36年(秋田国体)

F級佐藤、Fe級中島、L級藤内、M級武藤、監督は藤内兄であった。

昭和37年(岡山国体)

B級三隅、Fe級中島、M級武藤、LH級鳴津、MH級松尾が参加した。会場金光町。

昭和38年(山口国体)

B級長久、Fe級中島、L級金崎、M級武藤、LH級鳴津が参加した。下関市が会場。

昭和39年(新潟国体)

B級三隅、Fe級長久、L級金崎、M級武藤、LH級鳴津らが参加した。

昭和40年(岐阜国体)

この年は41年の大分国体に備えて大分に移籍した木下がL級で優勝し、岩田(湯布院町教委)が4位に入賞した。

昭和41年(大分国体)

この年は高校4名、一般6名がフルエントリーとなった。B級中島6位、Fe級畑中2位、L級相良8位。しかし野木が失格したのは惜しかった。高校生は中島監督の率いる日田林工チームであった。一般は武藤が監督で、B級高

橋(法政)は6位、Fe級長久(別府自衛隊)8位、L級村田(別府自衛隊)8位、LH級岩田(湯布院町教委)は5位、M級木下(緑岡高校教)は大内選手に続いて2位、MH級龍(大分クラブ)は6位と夫々が健闘し総合4位となり天皇杯得点にかなり貢献した。

昭和45年以降平成7年まで

大分国体が終わった次の年、日韓親善大会が湯布院町で行われた。金海男団長以下韓国選手団を迎え日本チームは善戦した。大分国体の前から全九州、全国高校総体、全日本、全日本社会人とたて続けに色々な行事が繰りひろげられた。42年埼玉国体にはL級長久が6位LH級岩田は4位になったが、他の選手は大分を去っていった。その後長期に亘って国体には正規の選手団を派遣し続けたが、8位までに入賞する者はたまに出たが上位入賞者はなかった。しかし高倉(日田市役所)、星野(大分市観光協会)、佐藤良二(鶴海興産)、佐藤好一郎(県民生協)、寺岡(大分工業高教)、野木誠一郎(野木建設)らは優秀なリフターであった。

平成7年(福島国体)

本年の福島国体では少年、成年合計41点を取り、この種目で13位、天皇杯得点に貢献した。得点源になったのは成年59kg級田所S・J5位(法政)、64kg級後藤(法政)S8位、76kg級上野(九共)S4位・J6位、少年59kg級原田(四日市)S4位、J4位、64kg級八坂(杵築)S・J2位であった。

大分県として特筆すべきことは、県体にシニア(40歳以上)の部を加えてきたことである。そのためリフターたちは40歳を過ぎてても競技を見捨てずバーベルを握ってきた。全日本マスターズにも多数の者が参加した。やがて全日本マスターズで示した力量を世界の松舞台で誇示する時が近づいた。第8回世界マスターズには大分県から2名、武藤と関野がオックスフォードのポリテクニクス大学体育館で開催された競

技で2名とも銅を胸に帰国した。それをきっかけに第9回(93年)アトランタには4名中銀2個をとり、中島と武藤が帰国した。第10回大会(94年)オーストラリアで6名参加銀3、中島、高倉、武藤がメダリストとなった。

更にそれより10日後にプリスペインで開催されたワールドゲームでは91kg級6群で武藤は接戦の末、体重差で勝ち日本チームで唯一の金をものにした。また93年は記録改正の年になり、Sで1位となり、その記録は世界記録となった。96年にはこの大会はカナダのオンタリオ州カリングウッドで開催される予定であるが、日本からは30名以上が出場しようとしている。

全日本マスターズが5歳きざみでないことは55歳以上のA級のリフターたちの参加熱をそぐことになるのではないかと、62歳以上の者は心配している。80歳以上の老リフターが世界のタイトルをかけて毎日練習していることを忘れてはならない。

日本協会への謝辞

井口先生、美山先生、そして中村先生を始めとする数多くの先輩諸氏が大分県を訪れ、ウエイトの技術伝達、大会運営や激励を賜ったことに深甚の謝意を捧げるものである。特にJWAはアジア諸国の指導的重責を果たしながら、地球規模のウエイトリフティングの支柱となることを希望している。

〈現役員〉

会 長	佐藤 文生			
副 会 長	佐藤 謹			
理 事 長	武藤 久木			
理 事	中島 豊	炭本 嘉一		
	星野 忠人	高倉 隆人		
	高見 春生	雷安 哲生		
	為末 純司	藤原十三生		
	河野 久実	木下 勝弘		
	寺岡 陽一	山崎 成三		

宮崎県

事務局 〒886 宮崎県小林市大字堤108-1 小林商業高等学校内
横山 尚 TEL 0984-23-4174

歴代会長

初代 川越 石男 (昭和38年～)

第2代 兒玉 雅亘 (昭和60年～)

第3代 野間 優 (平成5年～)

〈沿革〉

協会創立に至る経緯

昭和37年当時、保健体育課指導主事
で、ウエイトリフティングの必要性を
説き、自らもウエイト・トレーニング
を取り入れて超高校級の短距離選手や、
走り高跳びの選手を育てた倉山久信を
岡山国体に派遣し、宮崎県ウエイト協
会を発足させるべく他県の協会の実態
を見学させ、日本ウエイトリフティ
ング協会の事務局と連絡を取り、組織作
りのノウハウを教えてもらった。

まず倉山は選手の獲得が1番だと考
え、柔道の教師、警察学校、旭化成を
訪ね、力に自信のある若者を集め県民
体育大会の最中に飛び入り歓迎という
ふれ込みで、Pを中心に約20名前後で
第1回の大会を開いた。

その中から約10名程度を選び、また
高校に部を作るためウエイト・トレー
ニングの指導という名目であらかじめ
選抜していた高校の体育の教師を集め
日本協会から、野中専務理事を講師に
第1回講習会を開いた。

昭和38年4月ある程度選手も定着し、
高校にも同好会的な部が何校かできた
ので当時県議会議長だった川越石男を
会長に、宮崎市市会議員だった海老原
多門を副会長、倉山が理事長、理事に
高校教師の長野、藤井、田中で宮崎県
ウエイトリフティング協会が発足した。

〈年次別概況〉

昭和38年

協会設立、初代会長に川越石男就任、
第18回山口国体に初出場。

昭和44年

県協会事務局を兒玉宅に置き、事務局
長に兒玉雅亘就任。

昭和45年

第12回九州ウエイトリフティング選手
権大会を宮崎市で開催。

昭和48年

第10回全日本社会人兼第1回全日本実

業団選手権大会を宮崎市で開催。

昭和51年

倉山久信が副会長、後任の理事長に長
野久夫が就任。

事務局を高鍋農業高校に移し、事務局

長に赤星宏一が就任。

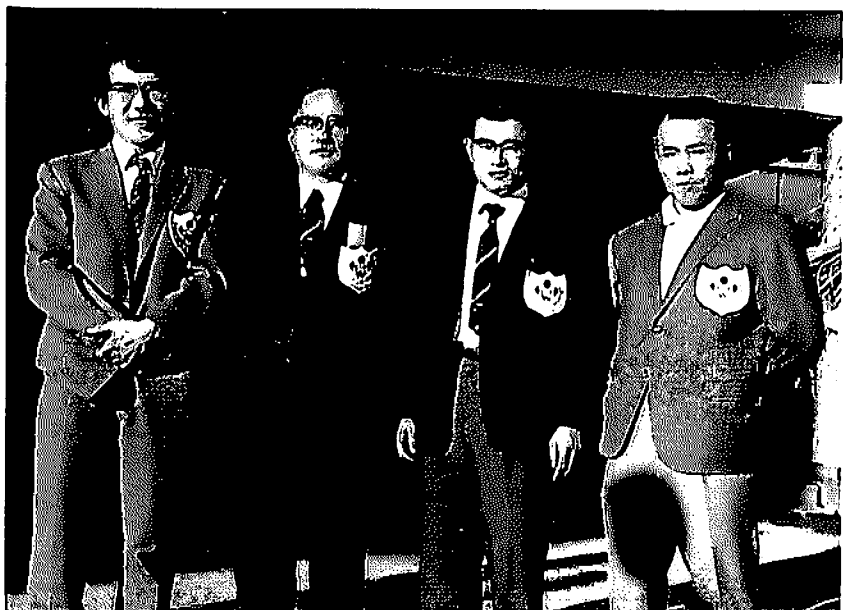
昭和53年

第20回全九州ウエイトリフティング選
手権大会を新富町で開催。

この大会は、宮崎国体の為の競技役員・



昭和44年10月、長崎国体(松浦市)



昭和46年8月、沖縄・九州親善大会(那覇市)

競技補助員養成のために実施。
第32回九州高校総体を新富町で開催。
第34回国民体育大会のリハーサル大会として実施。

60kg級 増田成正(高鍋農) 優勝

昭和54年

第34回国民体育大会(新富町)「日本ふるさと宮崎国体」開催。競技会場に天皇陛下を迎える。

〔成年の部〕

監督 岩崎 修平(旭化成)

コーチ 大久保 健(旭化成)

56kg級 秋和 保男(県スポーツ村) 7位

75kg級 島田敬四郎(王子製紙日南) 7位

82.5kg級 水迫 勇(小林工業教諭) 7位

90kg級 常深 英登(県スポーツ村) 5位

〔少年の部〕

監督 牧野 弘(旭化成)

コーチ 赤星 宏一(高鍋農)

52kg級 金子 秀伯(高鍋農) 8位

56kg級 中原 保(高鍋農)

67.5kg級 小野 康浩(延岡工)

昭和55年

栃木国体

〔少年の部〕

75kg級 清 健次(高鍋農) 3位
副会長、倉山はマレーシア日本人学校に赴任。

昭和56年

滋賀国体

〔少年の部〕

52kg級 井倉 利明(小林工) 6位
長野理事長から旭化成の岩崎修平に引き継ぐ。

事務局を延岡第二高校に移し、福田開造が事務局長に就任。

昭和57年

島根国体

〔少年の部〕

52kg級 大田 浩秋(小林工) 優勝

全国高校総体(鹿児島県)

52kg級 大田 浩秋(小林工) 2位

日韓ユース

52kg級 大田 浩秋(小林工) 2位

昭和58年

群馬国体

〔少年の部〕

52kg級 井倉 利明(小林工) 8位

九州高校総体

56kg級 東 隆一(小林工) 3位

60kg級 富重 祥二(小林工) 3位

昭和59年

事務局を小林工業高校に移し、副会長

に元保健体育課課長、野間優が就任。

昭和60年

鳥取国体

〔少年の部〕

56kg級 岡田 浩典(小林工) 6位

60kg級 堀添 俊次(小林工) 7位

九州高校総体

団体 小林工 優勝

60kg級 堀添 俊次(小林工) 2位

新会長に兒玉雅直が就任。

理事長に高力健が就任。

昭和61年

山梨国体

〔少年の部〕

60kg級 安影 武志(小林工) 12位

82.5kg級 谷村 幸治(小林工) 18位

九州高校総体

60kg級 安影 武志(小林工) 6位

67.5kg級 福元 誠(小林工) 3位

82.5kg級 谷村 幸治(小林工) 3位

第28回九州ウエイトリフティング選手権大会を宮崎市で開催。

昭和62年

会長に兒玉雅直が就任。

事務局を小林高校に移し、事務局長に水迫勇が就任。

昭和63年

全国高校選抜大会

52kg級 永友 憲治(小林工) 5位

平成元年

全国高校選抜大会

90kg級 松島 正樹(鵬 翔) 5位

九州高校総体

90kg級 松島 正樹(鵬 翔) 3位

全国高校総体

90kg級 松島 正樹(鵬 翔) 7位

平成2年

事務局を高鍋農業高校に置く。

事務局長に横山尚。

九州高校総体

52kg級 松田 勲(日向工) 3位

56kg級 長堀 榮作(延岡工) 3位

60kg級 木下 義啓(小林高) 4位

九州選手権大会(福岡県)

56kg級 東郷 浩二(共立大) 3位

福岡国体

〔成年の部〕

52kg級 酒井 隆一(UMKスイミ) 6位

平成3年

平成4年度に全国高校総体を宮崎県で開催するため、九州高校総体を本県の佐土原町で開催。

九州高校総体(宮崎県・佐土原町)

56kg級 深川 幸雄(小林工) 2位

九州選手権大会(大分県)

52kg級 酒井 隆一(UMKスイミ)

2位

56kg級 東郷 浩二(共立大) 優勝

60kg級 小川 浩幸(共立大) 2位

100kg級 松島 正樹(宮産大) 4位

石川国体

〔成年の部〕

52kg級 酒井 隆一(UMKスイミ) 8位

全国高校選抜大会(平成3年度)

52kg級 永友 清(小林高) 3位

56kg級 松元 武博(小林高) 3位

平成4年

今年は、本県で全国高校総体が開催される年である。各大会に於て今までの選手強化がためされる年であった。

全九州選手権大会(宮崎県)

52kg級 酒井 隆一(かみむらスポ) 2位

56kg級 東郷 浩二(共立大) 優勝

60kg級 兒玉 統匡(桃学大) 2位

60kg級 小川 浩幸(共立大) 3位

100kg級 松島 正樹(宮産大) 4位

九州高校総体(沖縄県)

52kg級 永友 清(小林高) 優勝

60kg級 松元 武博(小林高) 2位

100kg級 内之倉和彦(小林高) 3位

全国高校総体(宮崎県・佐土原町)

総監督 長野 久夫(佐土原高)

団体 小林高等学校 6位

監督 水迫 勇

52kg級 永友 清(小林高) 5位

56kg級 爪山 康彦(小林高) 2位

100kg級 内之倉和彦(小林高) 8位

60kg級 松元 武博(小林高)

67.5kg級 山縣昭一郎(小林高)

地元開催の全国大会に参加した学校及び選手名

小林工業高等学校

監督 川越 港

56kg級 岩口 孝範 13位

67.5kg級 梅木 一 29位

75kg級 田中 善哉 43位

82.5kg級 岩元 政貴 20位

延岡工業高等学校

監督 植松 義文

56kg級 東郷 賢治 12位

60kg級 渡部 公文 失格

宮崎日大高等学校

監督 権藤 克彦

60kg級 兒玉 傑互 46位

高鍋農業高等学校

監督 横山 尚

67.5kg級 萬代 宏 失格

佐土原高等学校

監督 村田 恒明

75kg級 梶村 佳史 48位

門川農業高等学校

監督 大田 叶一
82.5kg級 那須 孝宏 36位
山形国体
〔成年の部〕

52kg級 酒井 隆一(かみむらスポ) 6位

56kg級 東郷 浩二(共立大) 5位
〔少年の部〕

56kg級 重山 康彦(小林高) 7位
60kg級 松元 武博(小林高) 5位

平成5年

事務局長が小林商業高校に転勤のため、
事務局を小林商業高校に置く。

全国高校選抜大会

76kg級 川崎 優一(鷗翔) 6位
九州高校総体(佐賀県)

59kg級 東郷 賢治(延岡工) 優勝
70kg級 田中 喜哉(小林工) 優勝

83kg級 那須 孝宏(門川農) 3位
徳島国体

〔成年の部〕

56kg級 東郷 浩二(東栄空調) 3位
九州高校選抜大会(熊本県)

団体 小林高校 3位

54kg級 吉牟禮好智(小林高) 2位

54kg級 福留 厚(小林高) 4位

99kg級 黒肱 武(小林高) 2位

平成6年

九州高校総体(大分県)

59kg級 田中 伸助(延岡工) 4位

76kg級 川崎 優一(鷗翔) 優勝

91kg級 安藤 隆(延岡工) 4位

99kg級 黒肱 武(小林高) 4位

九州選手権大会(鹿児島県)

54kg級 酒井 隆一(自営) 2位

59kg級 東郷 賢治(共立大) 4位

64kg級 東郷 浩二(東栄空調) 優勝

91kg級 内之倉和彦(日体大) 3位

愛知国体

〔成年の部〕

64kg級 東郷 浩二(東栄空調) 2位

平成7年

九州高校総体(鹿児島県)

54kg級 伊東 友介(真鍋農) 4位

70kg級 三森 賢志(小林工) 4位

99kg級 内山祥太郎(小林高) 4位

九州選手権大会(熊本県)

59kg級 東郷 賢治(共立大) 3位

64kg級 東郷 浩二(東栄空調) 優勝

福岡国体

〔成年の部〕

64kg級 東郷 浩二(東栄空調) 3位

〔少年の部〕

70kg級 三森 賢志(小林工) 9位

九州高校選抜大会(長崎県)

76kg級 内之倉太純(小林高) 2位

〔少年の部〕

70kg級 三森 賢志(小林工) 9位

平成8年

平成8年1月21日(日)に第4回九州高

校選抜大会を県体育館別館で実施。男子選手68名・女子選手8名で盛大に開催。宮崎県の競技も国際的な選手が育ち県協会も競技力向上に力を入れている。東郷浩二選手(東栄空調)のオリンピック参加を県民全体で応援している。

最後に宮崎県ウエイトリフティング協会発展と競技力の向上は、前会長の兒玉雅亘の尽力の賜である。

日本ウエイトリフティング協会の今後の更なる発展を希望します。

〈現役員〉

名誉会長	川越 石男		
名誉会長	兒玉 雅亘		
会長	野間 優		
副会長	倉山 久信	高力 健	
	長野 久夫		
理事長	赤星 宏一		
常務理事	田代 均	水迫 勇	
	福田 開造	牧野 弘	
理事	藤井 猪徳	佐藤 康人	
	押川 信義	梶原 正一	
	植松 義文	河野 元彦	
	酒井 隆一	眞方 正之	
	福島 博明		
事務局長	横山 尚		

鹿児島県

事務局 〒891-21 鹿児島県垂水市上町114
伊地知 巖美 TEL 0994-32-1111

沿革

本県ウエイトリフティング協会は、昭和44年4月に初代会長に上原三郎が就任して発足した。本県において重量挙げは未普及種目であったので、これを広く県民に知らせ選手の育成と指導者の育成を図ることが第一の課題であった。鹿児島国体で垂水市がウエイトリフティング競技会場に決定して、昭和45年4月から垂水市長町田四郎が2代目会長として就任した。

鹿児島国体を成功させるため、また国体での総合優勝を目指して強化指定校も決まり、選手の発掘、審判技術講習会、九州大会の開催、選手強化に努めた。

ウエイトリフティング競技を普及させるため、毎年小、中、高校の運動会を利用して公開演技を実施した。努力の甲斐あって鹿児島国体において総合4位の成績を収めることができた。また、48年千葉国体において高校男子I級で水迫勇が優勝し、出場選手全員が4以内の入賞という高校勢の活躍で、ついに総合優勝を成し遂げた。

昭和50年4月から3代目会長として垂水市長枝本豊助が会長に就任した。この年は第1回ジュニア世界選手権大会がフランスのマルセイユで開催され、本県協会から初の世界大会に水迫勇を送ることができた。

昭和54年4月から4代目会長として垂水市長八木栄一が就任した。

昭和55年には、鹿児島商工高校から大阪商大に進学した宮下日出海がモスクワ・オリンピック日本代表となったが、東西冷戦の最中、大国の政治駆け引きに翻弄され、結局西側はモスクワ・オリンピックをボイコットしたことは、記憶に新しい。しかしその不幸をバネ

に4月後再度挑戦し、昭和59年ロサンゼルス・オリンピック日本代表となり、52kg級4位の成績を残したのである。

昭和57年には、鹿児島国体後10年を記念して全国高校総体が鹿児島県で開催された。ウエイトリフティング競技は始良郡牧園町であった。

昭和58年から5代目会長として、県議の大川和郎が就任した。

昭和63年から6代目会長として、和田和美が就任した。

平成7年4月から7代目会長として、鹿児島市議の中島蔵人が就任した。

平成8年は鹿児島県ウエイトリフティング協会にとって記念すべき年となった。池畑大、宮路山久の2名がアトランタ・オリンピック出場という快挙をなし遂げたのである。オリンピック日本代表7名中2人が本県出身である。

協会発足以来、多くの輝かしい戦績を残し、優秀な人材を輩出できたのは、

歴代会長

- 初代 上原 三郎 (昭和44年～)
- 第2代 町田 四郎 (昭和45年～)
- 第3代 枝本 豊助 (昭和50年～)
- 第4代 八木 栄一 (昭和54年～)
- 第5代 大川 和郎 (昭和58年～)
- 第6代 和田 和美 (昭和63年～)
- 第7代 中島 蔵人 (平成7年～)

会長はじめ役員、関係者の努力の賜物である。

年次別概況

昭和46年

鹿児島太陽国体のリハーサル大会として全日本兼社会人選手権大会を垂水市で開催した。

昭和47年

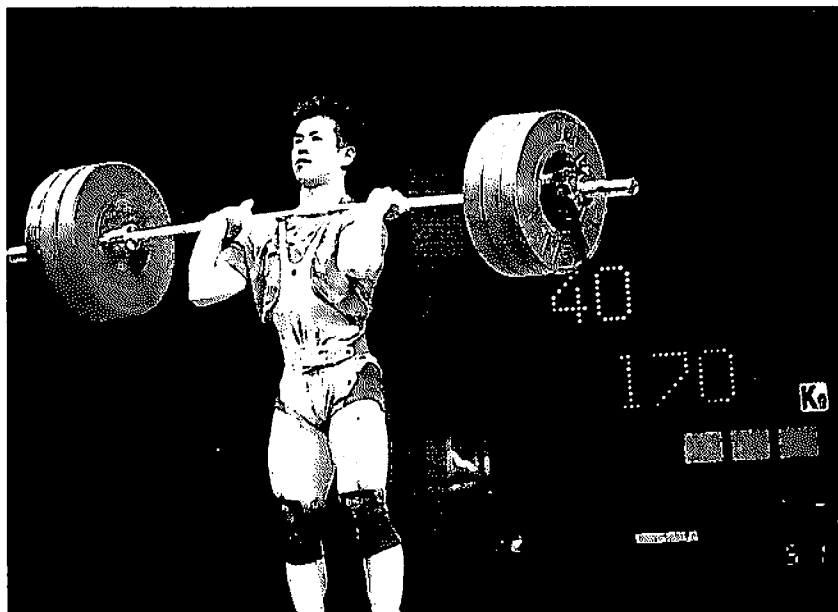
鹿児島太陽国体を垂水市で開催した。

昭和57年

全国高等学校総合体育大会を始良郡牧園町で開催した。

現役員

- | | |
|-------|----------------------------|
| 会 長 | 中島 蔵人 |
| 副 会 長 | 時任 克暢
藤川 弘洋 |
| 理 事 長 | 淵脇 正三 |
| 理 事 | 石原 和弘 古城大四郎
宮岡 則満 内田 昌教 |



アトランタ・オリンピック59kg級4位池畑大のJ170kg

◎ 沖縄県

事務局 〒901-05 沖縄県具志頭村字具志頭1 具志頭村教育委員会(社会教育課)内
平良 朝明 TEL 098-998-7018

〈沿革〉

創立に至る経緯

沖縄では、昔から拳石という球形の石をかついだり両手で差し挙げたりして若者達が盛んに競い合っていて楽しんでいた。そのような環境にあった沖縄では、ウエイトリフティングが披露されたのも早く、昭和24年4月に那覇劇場に於いて沖縄体育祭の時、パーベルを米軍の体育施設から借用して競技を行った。空手マン、相撲、柔道と各分野から力に自信がある若者達がウエイトリフティングに挑戦したが、その結果は日本体育大学時代にウエイトリフティングの経験があった志村暁市が優勝の栄誉に輝いた。

沖縄体育協会の関係者がこの大会を観戦、ウエイトリフティングは県民の体格に適しており、将来有望種目と見て文教局(現教育庁)が器具を購入し、屋良朝晴氏(琉球政府文教局社会体育指導主事)と志村暁市氏(沖縄ウエイトリフティング協会初代理事長)、仲田豊順氏(沖縄高体連会長)が那覇高校で打合せ、昭和33年10月沖縄体育協会と関係者が協議して同年10月15日に沖縄ウエイトリフティング協会が結成された。

会長に、パーベルで身体を鍛練し空手を指導していた関係者で長嶺将真を推し、副会長に伊良波長正と志村暁市を選任し、沖縄ウエイトリフティング協会を発足させた。

創立翌年(昭和34年)第14回国体(東京)に2名の選手が参加して14位と20位の成績をあげ、予想以上の成果だと高く評価された。

第15回国体(熊本)にも参加したが、普及がなされず、その後協会は有名無実の状態となった。昭和38年まで協会が維持されたのは普久原朝二の協力があったからである。

その後の足跡

有望視されているウエイトリフティ

ング協会を見るに見かねて、自ら進んで会長に就任したのが、沖縄柔道連盟副会長の役職にあった松川國春であった。

沖縄ウエイトリフティング協会再起にあたり、組織面の強化と指導者の養成、選手育成、普及活動と目的を達成するために、副会長人事に奔走した結果、スポーツに理解があって青少年育成に惜しまず協力してくれる会社経営者の古堅宗秀(沖縄通信建設)と前原信明(光南薬品)の両氏を推し、理事長に屋良朝晴(沖縄タイムス社記者)を選任し態勢がととのった。

指導者養成、選手育成は暗中模索で、競技規則の勉強会から始めたものである。沖縄体育大会、記録会等は那覇市内の高等学校のグラウンドで開催したおかげで観衆が集まり、普及活動に役立った。

競技人口はわずかながら競技者も協会も目標とする国民体育大会への参加を目指し一丸となって取り組んだかいあって、第20回の“成人式”を迎える岐阜国体へ、熊本国体以来5年ぶりの国体参加が実現した。

第20回岐阜国体の沖縄代表の陣容は14種目に132人の参加で、ウエイトリフティングは監督の松川國春とFe級の玉栄正雄、L級伊波清孝、M級普久原朝二の4人であった。

当時の沖縄は、米国の施政権下において、本土に渡航するのは外国あつかいで、国体へ参加するにもパスポートが必要だった。渡航手続きが完了し、パスポートを手にして始めて国体参加の実感がわいたものである。

国体の経験のない沖縄選手団はあまりの規模の大きさに圧倒され、競技の成績は土産にはならず、強い闘志と技術のみやげにした。もう一つ大きな土産があった。それは日本ウエイトリフティング協会理事長・飯田勝康氏から「沖縄へ本土の一流選手を派遣したい」と松川会長に申し入れがあった事であ

歴代会長

- 初代 長嶺 将真 (昭和33年～)
- 第2代 松川 國春 (昭和39年～)
- 第3代 古堅 宗秀 (昭和50年～)
- 第4代 具屋 秀信 (昭和57年～)
- 第5代 名嘉真武美智 (昭和58年～)
- 第6代 佐久本嘉春 (平成2年～)

る。

さっそく、受け入れ準備に取り組みが、パーベルも施設も皆無で思案している時に、国場幸太郎氏(国場組社長)の招きで来島していた日本体育協会理事・米本卯吉氏が、足腰の強い沖縄の人にもっとも適したウエイトリフティング競技の育成に協力したいという強い希望をのべて帰京された。そして翌昭和42年に公認パーベルが送られてきたのが、沖縄の選手と公認パーベルとの出合いの最初であった。

パーベルの贈呈式は、ウエイトリフティング競技の指導者養成、普及活動事業の一環として、日本ウエイトリフティング協会に役員と選手の派遣を要請し、副会長の井口幸男氏と東京オリンピックの金メダリスト三宅義信氏を派遣していただいた。指導を兼ねた模範演技会場である琉球大学の体育館で観衆800人余を前に米本卯吉氏のメッセージの代読、公認パーベルの贈呈式が挙行された。

従来は週に一度米軍の施設内にある体育館で練習し、それ以外はコンクリートで固めた自家製のパーベルで各自自分の庭先で練習をしていたが、パーベルが寄贈されてからはまるで人が変わったかのように練習に一段と熱が入りパーベルの奪い合いだった。

沖縄が九州ウエイトリフティング連盟に加盟し九州ブロックへ加わったのが昭和45年で、加盟した翌年に全九州と沖縄との記念大会を那覇で開催する運びとなったが、当時市立の体育館もなく又体育館をもっている学校も数少なく、高等学校、中学校、小学校と数多くの学校へ体育館借用に駆けずり回ったが、ウエイトリフティング競技にすんなりと借してくれる学校がなく、辛い思いをした。ようやくこれまでの経過と大会の主旨を申し上げたところ、安謝小学校の糸数青三校長先生(当時)がその主旨に理解を示され、青少年育成に役立てば、と心やすく体育館の使

用許可をだして下さった時には、まさしく地獄に仏の思いだった。

ウエイトリフティング競技は室内競技でありながら、これまで一度も室内で大会を経験したことがなかったが、初めて体育館で大会を開催することができるという事で感激だった。

大会運営は、九州ウエイトリフティング連盟会長の亀石敏夫氏と理事長の美山豊氏をはじめ、仰木重利氏(現在九州ウエイトリフティング連盟会長)の外連盟理事のご指導を仰ぎ、お陰様で無事大会を終了させることができた。

27年間米国の施政権下にあった沖縄が、日米両国の合意のもとに昭和47年5月15日に祖国日本へ返還されることになり、その記念に沖縄祖国復帰記念特別国体(若夏国体)の開催が決定され、選手強化を始め、指導者養成、競技運営役員の養成等の準備事業が開始された。

初めに取り組んだのが、選手強化と指導者養成であった。この事業に大きく貢献をされたのが現在の(社)日本ウエイトリフティング協会会長の林克也氏と同専務理事の桜井勝利氏であり、また競技運営役員養成については、野中義治氏(当時日本ウエイトリフティング協会理事長)、競技委員長の中村清氏であった。

特別国体(若夏国体)は、諸先生方のご指導により、会場の名護市にある北部農林高校では毎日満員の観衆で応援に沸いていた。反自衛隊派が校内に入り、少々トラブルはあったが、理事長・野中義治氏の冷静な采配で競技運営には何ら支障なく成功裡に導いた。

世界の競技規則が一部改正となり、P種目が廃止されて競技はSとC&Jの2種目で行うようになった。沖縄復帰特別国体(若夏国体)は、Pが廃止になって初めての全国大会であり、Pを得意種目とする選手にとっては不利となり、P種目を苦手とする選手には有利となった。その両者の気持ちが交錯する大会に興味をそそいだものである。

松川國春会長が勇退し、新会長には副会長だった古堅宗秀が就任した。古堅宗秀会長は、前会長の実績を踏襲し先を展望、高校生の選手強化、指導者の養成に10年の計を立て必ず沖縄から全国制覇する選手を輩出させる決意で諸事業に情熱を傾注した。

練習場の設置(疏通工ウエイトリフティング道場)、バーベルを始め練習に必要な器具を揃え、環境整備に余念がなかった。当時副理事長だった故西原稔

も人一倍情熱を燃した一人であった。

第32回国体(青森)には古堅会長を先頭に西原稔監督が率いる少年の部52kg級の平良朝治が、沖縄県ウエイトリフティング協会史上初の全国制覇を見事成し遂げた。56kg級の城間忠誠が4位入賞、75kg級宮城政章が優勝、団体・少年の部で優勝、総合準優勝という輝かしい成績で、天皇杯得点13点を獲得し沖縄県へ大きく貢献することができた。

この時機は会長不在だったが、競技力はめきめきと頭角にあらわし、

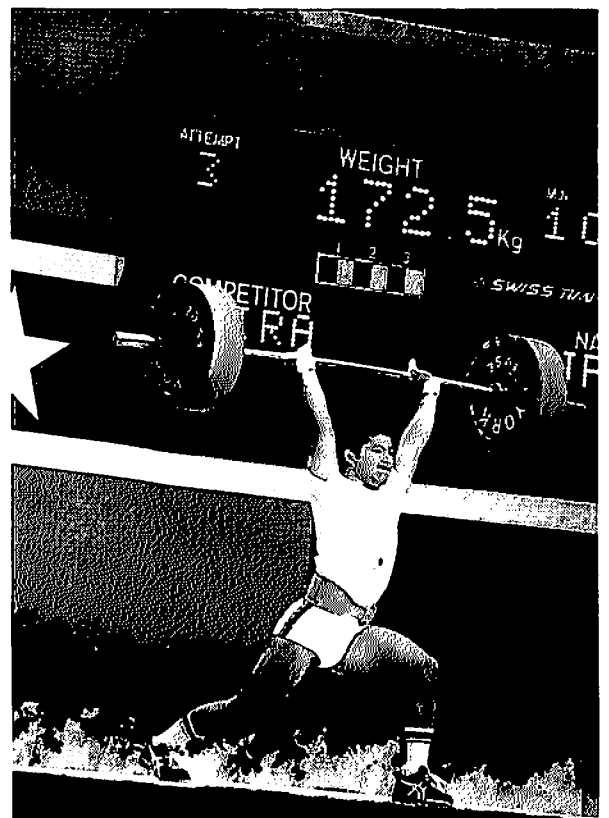
日本を代表してアジア・世界へと羽撃いていくなか、大里喜誠(沖縄県体育協会会長)の推薦で呉屋秀信(金秀勝社長)が会長に就任して、国内選手権大会はもとより、日本代表で海外へ派遣される選手の支援体制が整えられ、選手は心置きなく練習に励むことができた。

昭和58年から呉屋会長の後任として名嘉真武美智(沖縄ズバル自動車社長)が就任、1年後に沖縄県から初めてオリンピック日本代表として平良朝治が誕生した。平良朝治はロサンゼルス・オリンピックに続きソウル・オリンピックにも日本代表で出場した。

名嘉真会長は、組織の強化・選手育成のため、賛助会員制度を設置し、昭和62年に沖縄県で開催が決定している国体に備え万全を期した。

国体開催までに、全日本社会人兼全日本事業団選手権大会を始め、九州ウエイトリフティング選手権を含め高校の選手権と多くの大会を開催、第42回国体(海邦国体)は総合優勝の金字塔をうちたてた。

沖縄県ウエイトリフティング協会の永年にわたる夢であった国体優勝をみることができたのは、これまで積み重ねてきた組織の強化、指導者養成、選手育成と総てのことが、優勝という2文字の目標達成のために協会一丸とな



オリンピック2回連続出場した平良朝治選手(ロス大会)

ってそれぞれの役割を果たした結果が総合優勝を成し遂げたのである。

国体一巡目の最後として海邦国体が沖縄県で開催され、しかも総合優勝とは感慨無量ものがあつた。

平成2年名嘉真武美智会長が勇退して、新会長には副会長の佐久本嘉春(佐久本工機社長)が就任、現在に至っている。

佐久本会長は県内大会には総べて出席して激励し、又国体も毎回激励にかけつけるため、選手はいやが上にも闘志が漲り成績も常に上位入賞の源となっている。

第49回国体(愛知県)では天皇杯101点という驚異的な得点で2回目の総合優勝をなし遂げることができた。

〈年次別概況〉(国体等参加一覧)

昭和34年

協会創立後初めて第14回国体(東京)に2名の選手を送る。Fe級新垣盛繁14位、M級稲福盛安が20位と健闘し、高い評価をうけた。

昭和40年

第20回国体(岐阜県)の国体出場は5年ぶりである。松川國春監督外3人の選手、Fe級玉栄政雄22位、L級伊波清孝23位、M級善久原朝二が19位で、各階級出場選手が40人。

昭和41年



天皇杯得点101点を獲得して2回目の総合優勝の選手団、県体協役員、応援に駆けつけた父母の皆さん

第21回国体(大分県)監督松川國春外、F級大城一男、B級立津真徹、L級目島興速、M級普久原朝二の5名が出場した。

昭和42年

第22回国体(埼玉県)普久原朝二が監督兼選手で、F級に大城一男と2名の出場。

昭和43年

第23回国体(福井県)監督普久原朝二、F級大城一男が団体3回目とあって自力を発揮し、4位に入賞した。B級大城吉夫、Fe級大湾朝民。

昭和44年

那覇近郊の協会会員が毎月5ドルもの大金を会費として積立て、会員の一人である新川健治が経営する鮮魚店の一角を借りウエイトリフティング道場を設置、県外大会への出場を目指し日夜練習に励んだ。

九州大会へ初めて参加したのが、鹿児島県垂水市で開催された第11回全九州ウエイトリフティング選手権大会であり、監督の伊波清孝以下、Fe級立津真徹、L級大城安彦と金城正光、M級新川健治、LH級上運天正次の5名であった。

渡航手続きも完了しバスポートを手に出発、一昼夜「ひめゆり丸」にゆられて大会場入りと、船酔いの体を癒す間もなく翌日から競技が開始されたが、立津真徹が5位、大城安彦が2位、上運天正次が優勝に輝き予想以上の活躍であった。

第24回国体(長崎県)。監督伊波清孝、B級立津真徹、Fe級大湾朝民、M級渡慶次亨、LH級上運天正次の5名が参加。

昭和45年

第25回国体(岩手県)。監督伊波清孝、選手はF級宮城良建、B級芦峰隆敏、

Fe級大湾朝民、M級渡慶次亨が8位。

昭和46年

沖縄と全九州の親善大会を那覇で開催し、初めて体育館で大会が行われた。第26回国体(和歌山県)。監督伊波清孝で、選手F級平良文男8位、B級座喜味勲19位、Fe級玉代勢昇、L級大湾朝民、LH級渡慶次亨が大健闘し3位に入賞した。MH級中曾根正和。

昭和47年

第27回国体(鹿児島県)。監督立津真徹、選手はF級平良文男、B級芦峰隆敏、Fe級座喜味勲21位、L級屋良博之10位、M級渡慶次亨が3位入賞した。LH級中曾根正和。

昭和48年

沖縄の日本復帰記念特別国体が5月の若夏に開催され、総合開会式の旗手は沖縄のホープMH級に出場する渡慶次亨であった。この年にP廃止となる。監督大湾朝民、F級平良文男優勝、L級宇良宗廣、M級屋良博之5位、LH級中曾根正和2位、MH級渡慶次亨優勝と成功裡におえることができた。

第28回国体(千葉県)監督立津真徹、B級長元朝勝、Fe級宇良宗廣、L級屋良博之の各選手が出場した。

昭和49年

第29回国体(茨城県)。監督新垣秀夫、F級平良文男、B級武村朝勝、L級玉代勢昇、M級高江洲義次、LH級中曾根正和。

昭和50年

第30回国体(三重県)。監督少年の部伊波清孝、F級金城弘之、B級新垣雅敏、Fe級上原良彦、成年の部古堅宗秀監督以下4名、Fe級宇良宗廣、L級末吉孝光、M級大湾朝民、MH級中曾根正和。

昭和51年

第31回国体(佐賀県)。監督は少年と成

年の部を高江洲寛治が務めた。F級平良朝治、B級新垣雅敏、L級宮城政章、成年F級平良文男、B級末吉孝光、L級宇良宗廣、H級中曾根正和。

昭和52年

第32回国体(青森県)、少年の部監督西原稔、52kg級平良朝治優勝、56kg級城間忠誠4位、75kg級宮城政章優勝、成年の部監督川畑一男、52kg級武村朝勝、56kg級末吉孝光9位、60kg級宇良宗廣3位、67.5kg級大湾朝達20位。少年の部団体優勝し、総合準優勝に輝いた。

昭和53年

第33回国体(長野県)、少年の部監督豊見本朝弘、56kg級金城棟治3位、60kg級平良朝治優勝、75kg級高良満4位。成年の部監督伊波清孝、52kg級武村朝勝、60kg級城間忠誠、67.5kg級平良朝順、82.5kg級宮城政章。今年度も少年の活躍により団体で準優勝となる。

11月に第15回全日本社会人第6回実業団選手権を開催した。

昭和54年

第34回国体・少年の部監督大湾朝民、60kg級平仲康8位、与那覇重徳、75kg級松下忠光2位。成年監督嘉陽宗健、60kg級平良朝治4位、平良朝順、82.5kg級宮城政章6位、100kg級中曾根正和7位。

昭和55年

第35回国体、少年監督豊見本朝弘、60kg級平仲康2位、平仲健4位、82.5kg級松下忠光2位。成年監督根川弘夫、60kg級城間忠誠、67.5kg級平良朝治4位、82.5kg級宮城政章4位、100kg級中曾根正和4位、団体8位入賞。

昭和56年

第36回国体、少年監督西原勝雄、52kg級知念真栄8位、60kg級城間忠誠2位、82.5kg級久高悟7位。成年監督新垣秀夫、60kg級城間忠誠優勝、75kg級平良朝順6位、82.5kg級宮城政章優勝、中曾根正和、団体8位入賞。

昭和57年

第37回国体、少年監督大湾朝民、67.5kg級東恩納盛雄2位、82.5kg級弟子丸芳徳2位、90kg級上原秀光2位。成年監督宇良宗廣、60kg級城間忠誠2位、67.5kg級平良朝治2位、75kg級平仲健、82.5kg級宮城政章2位、団体3位入賞。

昭和58年

第38回国体、少年監督比嘉良晴、60kg級知念真栄6位、松島泰之9位、90kg級興屋武志4位。成年監督伊波清孝、52kg級比嘉定博8位、75kg級平仲健4位、82.5kg級松下忠光4位、90kg級宮城政章2位。

昭和59年

第39回国体、少年監督豊見本朝弘、52kg級伊藤淳 6位、75kg級伊敷和宏優勝、90kg級奥屋武志優勝。成年監督新垣秀夫、56kg級知念真栄 6位、67.5kg級平良朝治優勝、75kg級平仲健 4位、100kg級松下忠光 4位、団体 3位に入賞。

昭和60年

第40回国体、少年監督大湾朝民、52kg級赤崎清和 7位、56kg級伊波健一優勝、75kg級伊敷和宏優勝。成年監督根川弘夫、56kg級知念真栄 9位、67.5kg級平良朝治優勝、75kg級平仲健 4位、82.5kg級新垣盛幸 5位、団体 4位入賞。

昭和61年

第41回国体、少年監督豊見本朝弘、60kg級知花直樹 2位、67.5kg級新垣盛之 5位、75kg級上原康 2位。成年監督大湾朝民、52kg級知念真栄 4位、67.5kg級平良朝治優勝、75kg級平仲健 4位、82.5kg級新垣盛幸 3位、団体 4位入賞。

昭和62年

第42回国体(沖縄県)大湾朝民、豊見本朝弘両監督を中心に比嘉良晴、高江洲義次コーチが選手強化に取組み、成年の67.5kg級平良朝治の優勝を筆頭に82.5kg級新垣盛幸 2位、90kg級宮城政章 2位、52kg級知念真栄 3位、少年60kg級仲村寛志 2位、75kg級上原康 2位、82.5kg級知花隆之 3位で全員が3位内入賞で団体優勝の栄誉を得ることができた。

特に平良朝治が、全国の精鋭1万9千石余人を代表して力強く選手宣誓をした事は、総合優勝とともに沖縄県ウエイトリフティング協会にとって名誉であり誇りとするものである。

昭和63年

第43回国体、国体も第2巡目に入る。少年監督豊見本朝弘、52kg級平仲勝行、82.5kg級兼島博。成年監督大湾朝民、67.5kg級平良朝治優勝、75kg級平仲健、82.5kg級宮城政章、110kg級奥屋武志。

平成元年

第44回国体、少年監督比嘉良晴、56kg級宮城篤、75kg級比嘉敏彦、90kg級高嶺直、成年監督大湾朝民、67.5kg級知花直樹、75kg級平仲健、82.5kg級宮城政章、90kg級新垣盛幸、団体 5位。

平成2年

第45回国体、少年監督豊見本朝弘、52kg級伊森和博 S 2位 J 優勝、56kg級具志堅剛 S 優勝 J 優勝、75kg級金城靖 S 2位 J 3位、成年監督平良朝治、100kg級川如靖 J 7位。

平成3年

第46回国体、少年監督豊見本朝弘、67.5kg級仲村隆 2位、90kg級平仲勝正 3位、99kg級吉本久也優勝、成年監督平良朝治、52kg級伊森和博 4位、仲村寛志 5位、82.5kg級比嘉敏彦 4位、90kg級知花隆之 2位、団体準優勝。

平成4年

第47回国体、少年監督比嘉良晴、52kg級平良一善 3位、56kg級平良和士 5位、60kg級兼島豊 2位、成年監督平良朝治、82.5kg級比嘉敏彦 J 3位、90kg級宮城政章 7位、110kg級吉本久也 4位、団体で 5位。

平成5年

第48回国体、少年監督豊見本朝弘、54kg級知花達 T 5位、83kg級鈴木和美 J 155kg日本高新 T 優勝、91kg級平良一悦 S 125.5kg日本高新 T 2位。成年監督平良朝治、59kg級宮城篤 T 4位、91kg級比嘉敏彦 T 2位、99kg級金城靖 T 3位、

108kg級吉本久也 T 2位、団体準優勝、世界ジュニア鈴木、平良出場。

平成6年

第49回国体、少年監督豊見本朝弘、76kg級上間直樹 J 4位、83kg級鈴木和美 S 126kg、J 165kg共日本高新記録で優勝、91kg級平良一悦 J 167.5kg優勝日本高新。成年監督平良朝治、59kg級伊森和博 S 2位 J 6位、91kg級比嘉敏彦 S J 共大会新で優勝、99kg級金城靖 S 4位 J 2位、+108kg級吉本久也 S 168kg、J 210.5kg共日本新で優勝。国体で2度目の団体優勝。

吉本久也、翁長真由美の両者が、広島で開催されたアジア大会に出場。

平成7年

第50回国体、少年監督豊見本朝弘、59kg級大湾朝二 S 3位、64kg級崎原栄二 J 5位、99kg級内間健太郎 J 6位。成年監督平良朝治、54kg級伊森和博 S J 共 3位、99kg級比嘉敏彦 S J 共 2位、108kg級吉本久也 S 170.5kg優勝日本新、J 2位、団体 5位に入賞。

〈現役員〉

会 長	佐久本嘉春		
副 会 長	伊波 清孝	大城 豊	
	又吉 正信		
理 事 長	大湾 朝民		
副理事長	豊見本朝弘	根川 弘夫	
書記会計	大湾 朝達		
理 事	平良 朝治	中曾根正和	
	屋良 盛松	比嘉 良晴	
	高江洲義次	照屋 浩	
	上良 政実	屋良 博之	
	比嘉 定博		
監 事	慶田 信欣	川畑 一男	